



TITLE:

高麗事元期における官品構造の變革

AUTHOR(S):

矢木, 毅

CITATION:

矢木, 毅. 高麗事元期における官品構造の變革. 東方學報 2006, 79: 63-108

ISSUE DATE:

2006-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66901>

RIGHT:

高麗事元期における官品構造の變革

矢 木 毅

はじめに

- 一 文散階の構造
- 二 参秩の變遷
- 三 職事官の陞降
- 四 百官志の批判
おわりに

はじめに

高麗時代、王朝國家の統治機構を構成する官人たちには、それぞれ一品から九品にいたる位階⁽¹⁾(散官)と官職⁽²⁾(職事官)とが與えられていたが、一口に「官人」といっても、その社會的・身分的な出自や境遇はさまざまであった。この「流品」の意識——グループごとの等級の意識——を反映して、官僚機構を構成する官人たちにはさまざまな身分標識上の差等が設けられている。

唐制、官人の公服（常服）は、三品以上が「紫」、五品以上が「朱」、七品以上が「綠」、九品以上が「青」と區別されていたが、このうち「三品以上」の官人は「貴」、五品以上の官人は「通貴」と呼ばれ、三品以上は曾孫にまで、五品以上は孫にまで任官特權（蔭）を及ぼすことが許されていた。したがって、これらの官人とその家族が唐朝のいわゆる貴族階層を構成した。

これに對し、九品以上の官人本人、および七品以上の官人の家族は士族としての一定の特權を享受したが、八九品の官人の家族は、事實上、平民階層（庶人）と同等の取り扱いを受けることになっている。たとえば九品以上の官人本人、および七品以上の官人の家族は、流以下の罪を犯しても「贖」の特權を享受することができるが、八九品の官人の家族はその特權を享受することができない。

唐制を繼受した高麗前期の官僚制度においても、三品以上、五品以上、七品以上というこの分界線は、官僚統治機構の構成のうえにはっきりと刻み込まれている。

たとえば『高麗史』卷七十七、百官志二、東宮官、文宗八年（一〇五四）條の記述によると、このとき王太子（後の獻宗）の冊立に伴って、「三品官の孫、五品以上官の子」二十人、および「五品官の孫、七品以上官の子」十人を選び、それぞれを「東宮侍衛公子」「東宮侍衛給使」という、いわば王太子づきの侍從に任命したことがあった。その任命に際しては、貴族・官人の子弟のなかから容姿・才學の優れたものが嚴選されていたことは言うまでもないが、その時、容姿・才學とらんで選拔のひとつの基準となつたのが、三品以上、五品以上、七品以上によつて區分けされた、父祖の官界における位置づけであつたのである。

また『高麗史』卷七十四、選舉志二、學校條に記載された仁宗朝の式目都監詳定の學式によると、國子監に所屬する國子學・太學・四門學には、それぞれ「文武官三品以上の子・孫」「文武官五品以上の子・孫」「文武官七品以上の子・孫」

官品構造の變革（概念圖）

一品	卿（公卿）		一品	卿（公卿）
二品			二品	
三品			三品	大夫
四品	四品			
五品	大夫		五品	上士
六品			六品	
七品	上士		七品	中士・下士
八品			八品	
九品	中士・下士		九品	

【高麗前期】

【高麗後期～朝鮮時代】

を入學させ、また地方の州縣學には「八品以下の子、および庶人」を入學させることになっているが、これによっても高麗前期の官人とその家族の取り扱いが、三品以上、五品以上、七品以上の分界線によって、はっきりと區別されていたことを確認することができるであろう。

ところがこの分界線は、高麗後期のある時點より以降、二品以上、四品以上、六品以上の分界線に引き直されているのである（概念圖、参照）。たとえば『高麗史』卷六十三、禮志五、吉禮小祀、大夫士庶人祭禮、恭讓王二年（二三九〇）二月判の規定によると、

「大夫以上」は曾祖父母・祖父母・父母の三世を祭り、

「六品以上」は祖父母・父母の二世を祭り、

「七品以下、庶人に至るまで」は、ただ父母のみを祭る。

ということになっているが、ここで「大夫以上」というのは、忠烈王三十四年（二三〇八）、この年に再即位した忠宣王の官制改革によって、以後、四品以上の文官の位階（散官）は「〇〇大夫」と稱するようになったのであるから、當然、「四品以上」を指していると考えてよいであろう。

したがって、高麗末における父祖の祭祀儀禮は、當該の子孫の官位に照らして「四品以上」「六品以上」「七品以下」の三等級に分けて規定されていたということになる。ただし、同年八月庚申朔條における「士大夫家祭

儀」の規定によると、四品以上の中でも一・二品と三・四品とは差等があり、三・四品のものは供物の品数においては五六品と同様の取り扱いを受けることになっているから、結局、これらの一連の儀制は、二品以上、四品以上、六品以上の分界線を基礎として、その分節構造の上に設定されているといえることができるのである。

ちなみに、『禮記』祭法の規定によると、「大夫」は孝廟・王孝廟・皇孝廟の三廟を立て、「適士」は孝廟・王孝廟の二廟を立て、「官師」は孝廟のみを立てることになっているが、ここで「大夫」というのは、上述の高麗末の儀制では曾祖父母・祖父母・父母の三世を祭る「四品以上」の官人に当たっており、また「適士」というのは、陳澧の注に、

適士、上士なり。天子の上・中・下の士、および諸侯の上士は、皆二廟を立てるを得。^⑬

とあるから、祖父母・父母の二世を祭る「六品以上」の官人はこの「適士」(上士)に当たっており、さらに「官師」については陳澧の注に、

官師なる者は、諸侯の中士・下士、一官の長たる者、一廟を立てるを得。^⑭

とあるから、父母のみを祭る「七品以下」の官人は、この「官師」(中士・下士)に当たっている。つまり、古典的身分秩序に擬えると、高麗後期では「四品以上」が「大夫」、「六品以上」が「上士」、「七品以下」が「中士・下士」に、それぞれ相當していたのであって、さらに言えば、「二品以上」の官人は、「大夫」の上の「卿」(または公卿)に相當したといえることができるであろう。

それにしても、この「卿」「大夫」「上士」「中下士」の分節構造が、高麗前期においては「三品以上」「五品以上」「七品以上」という、唐制とまったく同様の分界線によって区分されていたにもかかわらず、それが高麗後期のある時点より以降、「二品以上」「四品以上」「六品以上」という、それぞれ一品階ずつを繰り上げた新たな分界線によって区分されるようになったのはなぜであろうか。

高麗後期のある時點より以降、というのは、具體的には忠烈王三十四年（一三〇八）、前述の忠宣王の官制改革によって、舊來、「五品以上」の文官に與えられていた「〇〇大夫」という位階（散官）が、以後、「四品以上」の文官にのみ與えられるようになった、その際のことと考えられるが、果たしてそれは、三品以上（卿）、五品以上（大夫）、七品以上（上士）の分界線を、それぞれ一品階ずつ繰り上げたというだけのことなのであろうか。それともその背景には、舊來の官職・位階の體系を全面的に改めなければならないような、なにか根本的な變革の意圖が込められていたのであるか。

本稿の課題は、高麗後期、具體的には高麗事元期における官品構造の變革を、高麗前期におけるそれとの對比において檢證し、その變革の意義を探ることにある。なお、この變革の事實を前提とした場合、『高麗史』百官志の記述には幾つかの矛盾點が浮かび上がってくるが、その點についても若干の文獻批判を試みることで、この變革の意味するところを一層深く掘り下げていくことにしたい。

一 文散階の構造

いわゆる「大夫」の分界線が、「五品以上」から「四品以上」に引き上げられたのは、文散階のうえでは忠烈王三十四年（一三〇八）、この年に再即位した忠宣王の官制改革に際してのことであったが、同じように、朝鮮王朝の太宗十七年（一四二七）においても、「三品以上」を「大夫」と爲し、「四品以下」を「士」と爲すという形で官品構造の變革が試みられたことがあった。『朝鮮王朝實錄』世宗十三年（一四三二）五月戊辰條に見える次の記事は、その太宗朝の受教の變更、ないしは取り消しを傳える内容であるが、そこに述べられている事柄は、本稿の主題である高麗事元期の官制

改革についても、ひとつの解明の手がかりとなるであろう。

詳定所啓すらく、「丁酉（太宗十七年、一四一七）六月日の受教の内に、『三品以上を以て大夫と爲し、四品以下を士と爲せ』とあり。今、古制を考えるに、中朝は六品以上を以て大夫と爲し、七品以下を士と爲す。本朝の五品は、また中朝の七品に准ず。請うらくは四品以上を以て稱して大夫と爲し、五品以下を稱して士と爲さん」と。これに従う。⁽¹⁵⁾

右の詳定所（禮儀詳定所）の啓によると、朝鮮・太宗十七年（一四一七）に「三品以上」を大夫と爲し、「四品以下」を士と爲す旨の國王の裁可（受教）が出されたところがあるが、これは高麗・忠烈王三十四年（一三〇八）以來、「四品以上」を大夫と爲し、「五品以下」を士と爲していた制度を、このとき改めようとしたことをいうのであろう。しかしその受教は、ただちには施行されなかったようである。それが世宗十三年（一四三二）になって、詳定所が今更のようにこの受教を引き出してきたのは、恐らくは當時進行中だった『續經濟六典』の改訂・編纂の過程で、この受教の取り扱いが問題となったためにほかなるまい。

その際、いわゆる「古制」を検討した詳定所は、

中國（中朝）では六品以上を大夫と爲し、七品以下を士と爲しており、本朝の五品は中國の七品に準じるから、（中國の制度から二品を繰り上げて）四品以上を大夫と爲し、五品以下を士と爲すのがよろしい。

という意見を述べているが、これは結局、太宗朝の受教を取り消して、高麗事元期以來の舊制に従うべきことを述べているのであろう。この詳定所の意見はそのまま裁可されたが、問題はその際に参照された「古制」というのが、一體なにを指しているのかということである。

前述のとおり、唐制、三品以上の公服（常服）は「紫」、五品以上は「朱」、七品以上は「綠」、九品以上は「青」と定

められていたが、中國ではその後、北宋・神宗の元豐元年（一〇七八）の改革によって青の公服が廢止され、四品以上は「紫」、六品以上は「緋」、九品以上は「綠」の公服を着用する制度に改められている。¹⁶ また南宋時代にもこの元豐の制度が襲用され、四品以上は「紫」、六品以上は「緋」、九品以上は「綠」の公服を着用する制度になっていたが、同じ意味で、「升朝官」は「綠」、「大夫以上」は「緋」を着用するとも言われていたから、宋制では九品以上の官人を「升朝官」、六品以上を「大夫」と呼んでいたことがわかるであろう。

『宋史』卷一百六十八、職官志八には南宋時代の「紹興以後合班の制」および「官品」が擧げられており、また『慶元條法事類』卷四、職制門、官品雜壓にも「官品」が明記されているが、それによると、「朝請・朝散・朝奉大夫」が從六品、「朝請・朝散・朝奉郎」が正七品となっているから、ここでも六品以上が「大夫」、七品以下が「士」(郎)と呼ばれていたことを確認することができるであろう。

ちなみに、この南宋の制度は華北の金朝の制度にも影響を與えており、金制でも文散階は六品以上を大夫と爲し、七品以下を士(郎)と爲している。¹⁹ つぎに、元制では五品以上が大夫、六品以下が士(郎)と唐制の舊に復しているが、その際、元制では金制の文散階を一品ずつ繰り上げて、例えば金制・從六品の奉直大夫・奉訓大夫を從五品とし、從九品の登仕佐郎・將仕佐郎を從八品としているために、結果として正從九品の文散官が存在しないという奇妙な構成になつてしまつた。²⁰ このため、明制ではこの點を改めて、正八品に修職郎・迪功郎、從八品に修職佐郎・迪功佐郎を新設し、元制・正八品の登仕郎・將仕郎、從八品の登仕佐郎・將仕佐郎をそれぞれ正從九品に繰り下げているが、五品以上を大夫、六品以下を士(郎)とする點では元制と同様である。²¹

こうして見てくると、朝鮮・世宗十三年（一四三二）に詳定所が参照した「中朝」の「古制」というのは、「五品以上」を大夫とする唐や元・明の制度ではなく、「六品以上」を大夫とする宋の元豐以降の制度を指していることがわか

るであらう。

次に問題となるのは、この宋・元豐以降の制度を踏まえて、詳定所が「本朝の五品は、また中朝の七品に准ず」と論じていることの根據であるが、この點については『高麗史』卷七十二、輿服志、百官祭服、恭愍王十九年（二三七〇）五月條に、明の太祖が「群臣陪祭冠服」を賜った際、高麗では、

中朝臣下の九等に比して、二等を遞降す。²²

という原則で、「王國七等」の冠服制度を定めたという記事や、同じことであるが、『明史』卷六十七、輿服志三、外國君臣冠服條において、宣德三年（世宗十年、一四二八）に朝鮮國王李禔（世宗）が上言して、

洪武中に、國王の冕服九章を賜わるを蒙るに、陪臣の冠服は、朝廷に比して二等を遞降せり。²³

と言っている記事などが参考となるであらう。

そもそも自國の禮制を定める際に、中國の冊封を受けた「諸侯國」は、中國の制度に比して「二等を遞降」するのが原則であったとすれば、當然、二等を繰り下げた状態で中國の官品構造と對應するように、諸侯國の官品構造は、あらかじめ中國のそれよりも二等級、繰り上げておかねばならない。

ただし、明制では「五品以上」を大夫とし、「六品以下」を士（郎）とするから、ここから二品ずつ繰り上げれば、むしろ太宗朝の受教のとおり、「三品以上」を大夫と爲し、四品以下を士（郎）と爲すことの方が理になつてゐる。にもかかわらず、詳定所がわざわざ「古制」を参照し、「六品以上」を大夫とする宋・元豐以降の制度を基準として、そこから二品ずつ繰り上げるといふ論理を展開しているのは、要は「四品以上」を大夫とし、「五品以下」を士（郎）とする朝鮮朝の現行の制度を、宋・元豐以降の古制に結びつけて正當化しているだけのことなのであらう。

しかしながら、ここで注目しておかなければならないのは、「諸侯國」である自國の官制が、「中朝」の官制より「二

等を遞降」しなければならないという發想それ自體である。そうしてそのような「事大的」な發想は、宋・遼・金に兩屬した前期の高麗よりも、元朝との一元的な宗屬關係下に組み込まれた事元期以降の高麗にこそ相應しい發想であると言わなければならない。

したがって、忠烈王三十四年（一二〇八）の官制改革において、はじめて四品以上を「大夫」と定めたことの背景には、元朝の「駙馬國」である高麗の官制を、元朝の官制とリンクし、整合化させる意圖が込められていたのではないかなど、少なくとも、それがこの變革の目的のひとつであつたのではないかと考えられる。

もちろん元制では、前述のとおり、五品以上を大夫、六品以下を士（郎）としていたから、「二等を遞降」すべき高麗では、正五品・從五品のそれぞれを一等として數え、「從五品」から二等を繰り上げた「從四品」を、元朝の「從五品」に對應させていたのであろう。

周知のとおり、忠烈王三十四年（一二〇八）における忠宣王の官制改革は、多くの點で元制を強く意識した内容となつてゐるが、たとえば文翰署（舊翰林院）と史官（舊史館）を併合して「藝文春秋館」を創設しているのは、元制、「翰林國史院」の制度に倣つたものにほかならない。²⁵

こうした官署名・官職名の變更にのみ止まらず、忠宣王の官制改革は官職・位階の體系そのものにまで及んでいたものであり、そうしてその變革の背景には、ひとつには元制との一體性、整合性を追及する意識が働いていたのである。

二 參秩の變遷

ところで、「五品以上」もしくは「四品以上」の「卿・大夫」の階層と、それ以下の「士」の階層とを區別する、最

も本質的な相違點は何であろうか。

中國古代の身分制度において、「卿・大夫」とは「采邑」を有する世襲的領主階層であり、その點において采邑を持たない「士」階層とは區別される。たとえば、『尚書』虞書・皋陶謨の孔穎達の疏に、

大夫は「采邑」を受け、氏族を賜り、宗廟を立て、世よに祀を絶やたず。故に「家」と稱す。⁽²⁶⁾

とあるのがその一例である。唐制、「五品以上」の官人に世襲的な諸特權が與えられていたのも、こうした古代領主階層としての「卿・大夫」の諸特權の遺制にほかならない。

また、唐制では「三品以上」を「冊授」によって、「五品以上」を「制授」によって任命したが、前者は皇帝による親任の形態であり、後者は宰相府（中書門下）の擬定による任命の形態である。⁽²⁷⁾ そうして「三品以上」および「五品以上」に昇進する場合には、必ず皇帝の「別制」を待つて昇進することになっていたから、結局、「五品以上」の「卿・大夫」の階層は、（宰相の擬定による場合も形式的には）皇帝の直接命令（制・敕）によって任命されることになっていたのである。

これに對し、「六品以下」の「士」の階層は、これこれの官職にこれこれの人物を充てるといふ有司の擬定に基づいて、皇帝がその人事案を承認する「奏授」の手續きによって、いわば皇帝の間接命令によって任命されていたにすぎない。⁽²⁸⁾ ただし、「六品以下」の「士」の階層のなかでも「供奉官」「員外郎」「監察御史」「太常博士」などの常參官は皇帝の「敕」によって、すなわち皇帝の直接命令によって任命されていたから、「六品官」の一部、すなわち「上士」階層の一部は、事實上、「大夫」階層に準じる取り扱いを受けることになっていたのである。

このため、「公服」の制度においても「五品以上」が着用する「緋」服は「六品官」の一部にもその着用が許されるようになっていった。北宋・元豐以降の制度において、「六品以上」の公服が「緋」と定められているのも、そのため

にはかならない。それは言い換えれば、「六品以上」が皇帝の直接命令によって任命される「卿・大夫」階層を構成した、ということの意味であろう。

同じことは高麗前期の制度についてもいえる。『高麗史』卷七十二、輿服志、公服の條に見える毅宗朝詳定の公服(常服)の制度によると、「文官四品以上」の公服は「紫」、「常參六品以上」は「緋」、「九品以上」は「綠」とされているが、これは一見して明らかなくとも、北宋・元豐以降の制度を受容したものにはかならない。

このうち、「常參六品以上」という表現は、嚴密には「六品官」のなかでも「常參官」に含まれるものだけが「緋」服を許され、未常參官(參外)は「綠」服を着用したことを示唆している。

高麗における「常參官」の範疇については、よくわからないところもあるが、唐制同様、「供奉官」「員外郎」「監察御史」などは常參官に屬し、さらには「閤門祇候」も常參官に屬したものと考えられる。⁽³¹⁾これに對し、大廟署令(從五品)、諸陵署令(從五品)などは「五品以上」であるから、本來は「常參官」の範疇に含まれていたはずであるが、神宗五年(一二〇二)の頃には「常參官」(參秩)の範疇からは除外されていた。また、「六品官」のなかでも寺監の「丞」(從六品)などは、同じく「常參官」(參秩)の範疇からは除外されていたと考えられる。たとえば、『高麗墓誌銘集成』二〇二、兪克諧墓誌銘に、「分司大府試丞」(大府寺の丞の試銜、從六品)で卒去した兪克諧のことを、位、「六品」に登る。然りといえども、公の徳を以てすれば、公の才を以てすれば、宜しく榮顯達官と爲るべくして、而も反つて「青衫」の秩に低回す。吾これを官と謂うに足らざるなり。⁽³²⁾

といっているのがその證據である。ただし、ここで「青衫」というのは、實際には未常參官(參外)の公服である「綠服」のことをいうのであろう。

ところが神宗五年(一二〇二)には、これら「常參官」の範疇から除外されていた「五六品令丞」の一部が「參秩」

に陞され、以後、これを契機として「六品以上」の官人はすべて「常參官」(參秩)の範疇に含まれるようになっていた。³³⁾

たとえば、高麗では忠烈王元年(一二七五)七月に、上國・元朝の制度を避けて新たに朝官の服章を定めているが、これによると、

「宰樞以上」は「玉帶」、

「六品以上」は「犀帶」、

「七品以下」は「黑帶」、

を帯びることになっている。³⁴⁾ このうち「犀帶」というのは「常參官」(參秩)にのみ着用が許された帶で、だからこそ「參秩」は「犀秩」とも呼ばれていた。³⁵⁾ したがって、この頃には「六品以上」は一律に「參秩」とみなされていたのである。

ところで「常參官」(參秩)というのは、國王の直接命令(制敕)によって任命される「大夫」階層のことを意味するから、忠烈王三十四年(一二三〇)の官制改革によって「大夫」の官品が「四品以上」に引き上げられた以上、「常參官」(參秩)の範圍も、このとき本来なら「四品以上」に引き上げられなければならないはずである。

しかしながら、忠烈王三十四年以降の公服(常服)の制度においても、參秩(犀秩)の範圍は依然として「六品以上」に据え置かれていた。たとえば、辛禍十三年(一二三八)には高麗は胡制(元制)を廢して新たに明朝の章服制度を採用しているが、そこでは、

「二品の、重大匡以上」は、「鍬花金帶」、

「三品の、兩府以上」は、「素金帶」、

「開城尹および三品の、大司憲より常侍に至るまで」は、「鍔花銀帶」、

「判事より四品に至るまで」は、「素銀帶」、

「五六品より七品の門下錄事・注書・密直堂後・三司都事、藝文春秋館・典校寺・成均館の八九品、外方の縣令・監務に至るまで」は、「角帶」、

「東西班七品以下」は、「氈帽・絲帶」⁽³⁷⁾、

と規定されているから、おおむね「卿」身分に相當する「一二品」が「金帶」、「大夫」身分に相當する「三四品」が「銀帶」、「上士」身分に相當する「五六品」が「角帶」、「中下士」に相當する「七品以下」が「絲帶」と定められていたことがわかるであろう。これは、前述の忠烈王元年（一二七五）の制度における宰樞の「玉帶」を「金帶」に改め、六品以上の「犀帶」を三四品の「銀帶」と「五六品」の「角帶」に分ち、七品以下の「黑帶」を「絲帶」に改めてゐるわけであろうが、「犀帶」に直接對應するのは「角帶」であるから、⁽³⁸⁾ここでも「六品以上」を「參秩」とする制度には變更が見られない。

また、恭愍王元年（一三五二）二月の敎によると、

政房は權臣より設く。豈に人を朝に爵するの意ならんや。今よろしく永えに罷むべし。その三品以下は、宰相と共に議して進退せん。七品以下は、吏兵部擬議して奏聞せよ。⁽³⁹⁾

とあるから、ここでも「六品以上」の「參秩」の官人は宰相府の擬定によって任命され、「七品以下」の「參外」の官人は有司（吏兵部）の擬定によって任命されていたことがわかる。⁽⁴⁰⁾したがって、宰相の擬定に基づき國王の直接任命を受ける「參秩」の範圍は、ここでも「六品以上」に据え置かれていたのである。

忠烈王三十四年（一三〇八）における官制改革の結果、文散階においては「大夫」の官品が「四品以上」に引き上げ

られた。にもかかわらず、服色制度や銓選制度においては依然として「六品以上」が「參秩」とされていたことは、矛盾といえは矛盾である。

しかしそれは高麗後期における專制王權の伸張に伴って、國王による直接任命の範圍が「四品以上」の「大夫」階層から「六品以上」の「上士」階層の一部、さらにはその全部にまで擴大していったことを反映しているのである。

三 職事官の陞降

次に検討しなければならないのは、位階（散官）に對應して除授される官職（職事官）の官品の變動である。

忠烈王三十四年（一三〇八）の官制改革によって、官人身分の高下を示す位階（散官）の體系は、「二品以上」（卿）、「四品以上」（大夫）、「六品以上」（上士）、「九品以上」（中下士）の分節構造に改められたのであるから、この位階に對應して除授される官職（職事官）の體系も、單純に考えれば、舊來よりそれぞれ一品ずつ自動的に繰り上げられたと豫想することができであろう。ところが、實際には必ずしもそのようにはなっていない。

たとえば、國子學・太學・四門學において教鞭をとる「國子博士」（正七品）、「太學博士」（從七品）、「四門博士」（正八品）は、忠烈王三十四年にはそれぞれ「成均博士」（正七品）、「諄諭博士」（從七品）、「進德博士」（從八品）に改められたが、このうち「七品以上」の「上士」に位置づけられていた國子博士、太學博士は、忠烈王三十四年の改革では「上士」の階層から外れて「七品以下」の「中下士」の階層に組み込まれてしまっている。⁽⁴⁾ このほかにも、前期官制における「七品」の官職が、忠烈王三十四年以後にもそのまま「七品」に据え置かれたことによって、實質的には「上士」階層から「中下士」階層へと降格されている事例は少なくない。⁽⁴²⁾

ただし、國子博士、太學博士などはもとと未常參官（參外）だったのであるから、「上士」階層がすべて「參秩」に組み込まれた忠烈王三十四年の段階では、これらが「參外」として「中下士」の階層に組み込まれていたことは當然といえは當然である。言い換えれば、官品構造の變革に伴つて、もとの「參外」の「上士」層は、同じく「參外」の「中下士」層に整理統合されていたのである。

「中下士」層は古典においては「官師」と呼ばれ、「一官の長」として下級官廳の運営を擔つていた。⁽⁴³⁾ もとの參外の上士層が同じく參外の中下士層に組み込まれていたことは、それだけ中下士層のポストが増大したことを意味しているが、これは中央集權政治の發達と、それに伴う行政實務の増大の結果として、官僚機構における「官師」の比重がそれだけ増大したことを示しており、延いては「官師」の多くを占める「本系常人」⁽⁴⁴⁾の官人たち——言い換えれば「庶人」出身の官人たち——の比重が、高麗後期において、それだけ増大したことを示唆している。

次に、前期官制における「五品以上」、すなわち「大夫」階層の官職のなかには、忠烈王三十四年以降もそのまま「五品」に据え置かれ、實質的には「大夫」層から「上士」層へと降格されているものが少なくない。たとえば六部の郎中（正五品、改稱して直郎、または正郎という）などがこれに當たるが、當時の「上士」層はすべて「參秩」に含まれていた——言い換えれば、「上士」は「大夫」に準じる階層であつた——から、この降格にはそれほど重要な意味はないであらう。

しかし、前期官制における「三品以上」、すなわち「卿」階層の官職のなかには、忠烈王三十四年以降もそのまま「三品」に据え置かれ、實質的には「卿」階層から「大夫」階層へと降格されているものが少なくないが、この降格には極めて重大な意味が込められていたと考えられる。たとえば、六部の「尙書」は「典書」と改稱されたが、その官秩は「正三品」に据え置かれていたし、また寺監の長官である「卿・監」は「尹・令・正」などに改稱され、その官秩は

「正三品」に陞されているが、その後、再び「從三品」に降されているから、これらは「二品以上」の「卿」階層には組み込まれず、實質的には「大夫」階層に降格されているのである。しかも、この「卿」階層は、國王の意思決定の過程に直接參與し得る「最上級官僚層」を構成していたから、この降格によって彼らの官界における位置附けは、實質的にも大きく引き下げられることになったのである。

舊來、文臣の尙書・卿監クラス、武臣の上大將軍クラスは「三品以上」の最上級官僚層を構成し、國政上の最要案件に關して國王の諮問に答える「會議」に參與する資格を與えられていた。⁽⁴⁵⁾ また「三品以上」の官人には「致仕官祿」を受ける特權が保證されていたが、これらは「三品以上」の「卿」階層が、高麗の「最上級官僚層」を構成した事實を端的に示している。そうしてこの「三品以上」の官人のなかからさらに五名の「宰臣」と三名の「樞密」——いわゆる「宰樞」——が國王によって選任され、日常的な政務はこれらの宰樞によって處理されていたのである。

ところが武臣の亂以降、宰樞の數はいわゆる「五宰七樞」に増大し、さらに事元期に入ると正任の宰樞で十一員、權授・商議のものを含めると末期には五六十人近くにまで膨れ上がっていった。⁽⁴⁷⁾ これは高麗後期の多事多難な政局において、相互に利害の對立する諸勢力をそれぞれ「宰樞」に引き入れ、政治勢力のバランスを圖つたことによる必然の結果であるが、反面、全會一致の合議制を原則とする宰樞會議（合坐）では宰樞間の意見がまとまらず、國家として迅速かつ的確な意思決定を行うことが次第に困難になっていった側面は否定できない。

このため忠烈王二十四年（一二九八）、忠宣王の最初の即位時の官制改革では、忠宣王は「宰執」（宰相・執政）の數を削減し、宰樞會議における意思決定の迅速化を目指している。

敎して曰く、「……惟れ宰執の數、古制に倍し、公家の議論、多少異同、事事に稽滯す。宜しくまさに減省すべし」

（『高麗史』卷三十三、忠宣王世家、忠烈二十四年五月辛卯條）⁽⁴⁸⁾

忠烈王三十四年（一三〇八）、忠宣王の再即位時の官制改革において、忠宣王が宰樞の母體となる最上級官僚層のスリム化を圖つたのも、これと同様の目的であろう。このとき、文臣の尙書・卿監クラス、武臣の上大將軍クラスはいずれも「二品以上」の最上級官僚層（卿）から「四品以上」の上級官僚層（大夫）に降格されたが、その結果、國政上の最重要案件に關して開催される「二品以上」（舊三品以上）の最上級官僚層の「會議」は、實質的には「二品以上」の「宰樞」の會議（合坐）とほとんど同じことになってしまった。

高麗の時、二品以上は、樞密院の堂上官と爲るを得。故に二品を拜する者は、これを「入樞」という（『龍飛御天歌』第一百六章、注⁴⁹）。

然れども「二品以上」は、豈に總じてこれを「宰相」と謂うべけんや。變理輔相の位に居る者にして乃ち眞の「宰相」なり。高麗の季、乃ち樞密以上を以て皆「宰相」と稱す。はなはだ謂れなきなり（『朝鮮王朝實錄』世宗二十一年正月丙午條⁵⁰）。

右の引用文中、「二品以上は、樞密院の堂上官と爲るを得」とあるのは、あくまでも忠烈王三十四年における官品構造の變革以降の話にすぎないが、この點については後に改めて検討を加えることにしよう。とにかく、「尙書」「卿監」クラスや「上大將軍」クラスの官人が「二品以上」の「卿」階層から排除されたことによって、高麗末期の「卿」階層は、すべて「宰相」によって占められるようになっていった。だからこそ次の朝鮮朝においても、「二品以上」のものは總じて「宰相」と呼ばれていたのである。

一方、實質的な格下げの目立つ中央の職事官（京官）とは對照的に、地方の職事官（外官）においては官品構造の變革の事實を忠實に反映して、當該官職の官品が大きく引き上げられている事例が少なくない。

たとえば地方支配の據點となる三京・四都護・八牧などの「界首官」では、通例、長官（使・知事）の職を空闕とし

て、副長官（副使）が實質的に長官としての役割を果たしていたが、この實質的な長官である「副使」は、官品構造の變革以前には、通例、六部の「郎中」（正五品）、または「員外郎」（正六品）を以て差遣されていた。幾つか實例を列挙すると、

尹彦頤は仁宗二年（一二二四）に禮部員外郎（正六品）・知制誥より禮部郎中（正五品、試銜？）を以て出でて全州牧の守（副使）となり、翌々に召還され、戸部員外郎（正六品）・知制誥を歴て右司諫（正六品）・知制誥に改められた（『高麗墓誌銘集成』五六、尹彦頤墓誌銘）⁽⁵²⁾。

鄭復卿は禮部郎中（正五品、試銜？）を以て尙州牧の守（副使）となり、入りて戸部・禮部の員外郎（正六品）を歴任した（『高麗墓誌銘集成』七一、鄭復卿墓誌銘）⁽⁵³⁾。

尹誦は戸部員外郎（正六品）を以て廣州牧の守（副使）となり、入りて禮部員外郎・知茶房事となった（『高麗墓誌銘集成』七三、尹誦墓誌銘）⁽⁵⁴⁾。

李軾は侍御史・右司郎中（正五品）より出でて廣州牧の守（副使）となり、知南京留守に改められ、入りて吏部郎中（正五品）・兼太子洗馬となった（『高麗墓誌銘集成』七六、李軾墓誌銘）⁽⁵⁵⁾。

金永錫は刑部員外郎（正六品）より「試禮部郎中」（正五品、試銜）を以て清州牧の守（副使）となり、その後、李資謙の亂に連坐して兵部員外郎・知制誥に左遷された（『高麗墓誌銘集成』一〇七、金永錫墓誌銘）⁽⁵⁶⁾。

これらはいずれも「員外郎」（正六品）または「郎中」（正五品）を以て八牧の「守」となった事例であるが、ここで「守」というのは長官である「使・知事」ではなく、副長官である「副使」を指す。その證據に、『高麗墓誌銘集成』九、文公裕墓誌銘によると、

文公祐は禮部郎中（正五品、試銜？）を以て清州牧の「副使」となり、任期滿了前に王命（宣）により中央に呼び戻

されて「左司員外郎」(正六品)を授けられた。⁽⁵⁷⁾

とあるから、八牧の「副使」は、通常、員外郎・郎中クラスの五六品の官人を以て差遣していたのである。

これに對し、「使」や「知事」として差遣する場合は、通例、三四品のものを差遣したようである。たとえば『高麗史』や『高麗墓誌銘集成』には、

晉州牧使・司宰卿(從三品) 崔復圭⁽⁵⁸⁾

攝司宰卿(從三品)・全州牧使任懿⁽⁵⁹⁾

などの在任記事が見えているし、また『宣和奉使高麗圖經』卷八、人物の序には宋朝の國信使節を迎接した地方官として、

刑部侍郎(正四品)・知全州吳俊和

禮部侍郎(正四品)・知清州洪若伊

戸部侍郎(正四品)・知廣州陳淑

の三人を擧げているから、八牧の長官である「使」や「知事」には、おおむね三四品のものを差遣し、適任者がいない場合は五六品のものを「副使」として差遣していたと考えることができるであろう。⁽⁶⁰⁾

ところが官品構造の變革以後、三京・四都護・八牧などの「界首官」の長官(使・副使)は、おおむね「四品以上」のものを差遣するように變化していった。たとえば、『朝鮮王朝實錄』世宗九年(一四二七)二月辛巳條は次のように述べる。

吏曹啓すらく、「前朝の舊制に、牧官・府官は、或いは四品を差して『副使』と稱す。その後、みな三品以上を以て充差す。……請うらくは、國初の制に依り、牧・都護府、もし三品なくんば、四品を以て差遣し、『副使』と稱

さん」と。これに従う。⁽⁶¹⁾

右の記事によると、前朝（高麗）の舊制として、八牧・四都護府などの長官職は、「三品以上」を差遣する場合には「使」と稱し、「四品官」を差遣する場合には「副使」と稱したとあるが、同じことは『高麗史』卷一百十、李齊賢傳にも、

請うらくは古制の如く、朝士の未だ入參せざる者は、必ず監務・縣令を経、「四品」に至れば、例として「牧守」と爲し、而して監察司・按廉使、必ず褒貶を行いて、これが賞罰を爲さんことを。⁽⁶²⁾

と述べられているから、李齊賢の當時、すなわち官品構造の變革以後には、「四品」の官人を牧・都護府の「副使」として、また「三品以上」の官人を牧・都護府の「使」として差遣していたことがわかるのである。具體的には、たとえば『拙藁千百』（高麗・崔濬撰⁽⁶³⁾）の刊記（至正十四年、恭愍王三年、一三五四、晉州牧開板）に、

晉州牧使・中正大夫（從三品上）・典校令（從三品）・兼管内勸農使崔龍生。

と見える事例などが、「三品官」を「使」とする證據のひとつとして擧げることができるであろう。

したがって、從來、牧・都護府の長官（使・知事）は三四品、副長官（副使）は五六品のもものが差遣されていたが、官品構造の變革以後には「使」は「三品以上」、「副使」は「四品」のもものが差遣されるように變化しているのである。

これは言い換えれば、從來、「五品以上」または「常參六品以上」の上級官僚層（大夫）のなかから「使・知事・副使」を差遣していたものが、官品構造の變革以後には「四品以上」の上級官僚層（大夫）のなかから「使・副使」を差遣するように變化していった、ということができであろう。したがって、上記の引用文で李齊賢が「古制」といつているのは、決して高麗の最盛期とされる「文宗朝の舊制」のことを述べているわけではなく、實際には忠烈王三十四年（二三〇八）における官品構造の變革以後の事實を述べているにすぎないのである。

ただし、『高麗史』百官志に記された文宗朝の官制では、「大都護府」および「諸牧」の長官（使・副使）の官秩は、「使」は「三品以上」、「副使」は「四品以上」と規定されているが、これは官品構造の變革以後の事例には合致しても、それ以前の事例には合致しない。この点において私は、「百官志」の記述にある種の疑念を抱いているのである。

次に、從來「七品以上」の中級官僚層（上士）のなかから差遣されていた牧・都護府などの「判官」（倅）や、防禦鎮および諸州郡の「副使」（守）などは、官品構造の變革以後には「六品以上」の中級官僚層（上士）のなかから差遣されるように變化していった。たとえば『高麗墓誌銘集成』四七、金誠墓誌銘によると、

功を以て典厩令（從七品）に調せられ、大府注簿（從七品）に遷る。本朝の人を用うるや、およそ官「七品」に至る者は、みな守に遣わして州を知（おさ）めしむ。故を以て、公もまた出でて寶城郡を刺し、秩滿ちて將作注簿（從七品）と爲る。⁽⁶⁴⁾

とあるが、これは官品構造の變革以前においては、「七品以上」の中級官僚層（上士）のなかから諸州の長官（知事）が任命されていたことを示しているであろう。これに對し、官品構造の變革以後には「六品以上」の中級官僚層（上士）が諸州の長官（知事）に任命されるようになっていく。いくつか具體例を擧げておこう。

奇轍の父、奇子教は、摠部散郎（正六品）より出でて宣州の守（知事）となった（『高麗史』卷一百三十一、叛逆五、奇轍傳）。⁽⁶⁵⁾

金永噉は、掖庭内謁者監（正六品）より出でて「知陝州事」となり、入りて「讞部散郎」（正六品）となった（『高麗墓誌銘集成』二六五、金永噉墓誌銘）。⁽⁶⁶⁾

朴元桂は忠肅王七年（一二三〇）に都官散郎（正六品）となり、忠肅王十一年（一二三四）に開城少尹（正四品）を以て知寶城郡事となり、忠肅後元年（一二三三）に通禮門判官（正五品）となった（『高麗墓誌銘集成』二七二、朴元桂墓誌

(67)
銘。

李齊賢の妻の瑞原郡夫人徐氏の父、徐仲麟は、「通直郎（正五品）・知瑞州事」であつた（『高麗墓誌銘集成』二八四、李齊賢墓誌銘）⁽⁶⁸⁾。

このように、官品構造の變革以降の事例を見ると、諸州の長官（知州事）に差遣されているのは、多くは散郎（正六品）、正郎（正五品）などの五六品官であるが、これは「七品以上」の中級官僚層（上士）の分界線が、官品構造の變革に伴つて「六品以上」に引き上げられたために、諸州の長官（知州事）もこれと連動して「六品以上」の中級官僚層（上士）を差遣するように變化していったものと考えられる。

ただし、『高麗史』百官志には「文宗定むらく」として、防禦鎮および諸郡の長官（使・知事）について、「使一人、五品以上」「副使一人、六品以上」と規定している。これは「五品以上」であれば「使」（または知事）と稱し、「六品」であれば「副使」と稱したという意味であろうが、その規定は官品構造の變革以後の事例には當て嵌まっても、それ以前の事例には當て嵌まらない。忠烈王三十四年（二三〇八）以前においては、諸州の長官（使・知事）は「七品以上」の官人を以て差遣していたのであるから、この點においても「百官志」の記述には疑問がある。

さらに、官品構造の變革以前においては、おおむね「八品」以上の官人を以て諸縣の長官である「縣令」に差遣していたが、その證據としては次のような事例を挙げることができる。

張允文は大府注簿（從七品、同正職？）を以て耽羅縣令となり、秩滿ちて、諸陵丞（從七品）・兼都兵馬錄事に拜せられた（『高麗墓誌銘集成』一五七、張允文墓誌銘）⁽⁶⁹⁾。

李瑞林は「八品官」より崔忠獻の推舉を受けて出でて牛峯縣令となり、入りて中書注書（從七品）となつた（『高麗墓誌銘集成』一五九、李瑞林墓誌銘）⁽⁷⁰⁾。

庚資諒は宰相の子なるを以て直ちに守宮署丞（正九品）に補せられ、ついで大樂署丞（從八品）に移り、出でて龍岡縣令となった（『高麗墓誌銘集成』一七九、庚資諒墓誌銘）⁽¹⁾。

崔瑞は高宗四十三年（一二五六）に祕書校勘（權務）となり、元宗元年（一二六〇）に出でて處仁縣令となり、元宗四年（一二六三）に入りて大官丞（從八品）・式目錄事となった（『高麗墓誌銘集成』二〇八、崔瑞墓誌銘）⁽²⁾。

右の諸事例を通覽すると、官品構造の變革以前、「縣令」のポストはおおむね「八品」の下級官僚層（中下士）の例調ポストであつたことがわかるが、官品構造の變革以後は、これが「七品」の例調ポストに引き上げられている。たとえば前掲の『高麗史』李齊賢傳には、

請うらくは古制の如く、朝士の未だ「入參」せざる者は、必ず「監務」「縣令」を經、「四品」に至れば、例として牧守と爲し、而して監察司・按廉使、必ず褒貶を行いて、これが賞罰を爲さんことを⁽³⁾。

とあるが、ここでは「監務」「縣令」は「入參」以前、すなわち「常參官」に昇進する以前の「七品」の官人の例調ポストとして位置づけられているのである。ただし、『高麗史』百官志には、

諸縣。文宗定むらく、令一人、七品以上。尉一人、八品⁽⁴⁾。

とあるが、繰り返し述べてきたとおり、官品構造の變革以前には縣令は「八品」の例調ポストであつたから、この「百官志」の記述はその文字どおりには受け入れることができない。

ちなみに、上記の李齊賢の提言を受けて、恭愍王二年（二三五三）には、縣令・監務は「京官七品以下」を以て差遣することになったが、これは要するに、「朝士の未だ入參せざる者は、必ず監務・縣令を經」、しかる後、「常參官」に昇進するという制度に改められたことを意味している。舊來、縣令・監務などの外官職には科擧に及第した知識人たち（登科士流）を差遣することになっていたが、高麗末期には外官への例調の制度が崩れて外官を經ずとも「參秩」に陞る

ことが可能であつたため、「士流」は縣令・監務などの外官職に就任することを忌避し、このため胥吏出身の官人を以て縣令・監務に差遣することが一般的となつていた。⁽⁷⁶⁾その後、恭愍朝・辛禔朝には紅賊・倭寇の被害に對應するため、臨時に五六品官を「安集別監」として差遣していたが、辛昌即位年（二三八八）八月にはこれを再び縣令・監務に改め、その官秩を「五六品」に陞秩して、「士流」を以てこれに任命するように改めている。⁽⁷⁷⁾

この改革以降、外官職はすべて「六品以上」、すなわち中級官僚層（上士）の例調ポストに引き上げられ、これが朝鮮朝の制度としてそのまま受け継がれていくことになったのである。したがって、朝鮮朝の官制においては下級官僚層（中下士）のための外官の例調ポストは存在しない。もともと、從九品の外官職に「駅丞・渡丞」が設けられているが、これは「士流」の職ではなく、所定の勤務年限を満了した胥吏（書吏）が、「駅・渡丞」の任用試験（取才）を経て任命されることになっている。⁽⁷⁸⁾また、高麗時代には門蔭出身の官人たちが、一旦、令史などの胥吏職に就任し、外官への例調をへて上級胥吏職である「録事」、さらには流内の職事官へと昇進していったが、朝鮮朝では「録事」は無位のもものが入屬し、所定の勤務年限を満了した後、守令の任用試験（取才）を経てはじめて「六品以上」の守令の職に任命されることになっている。⁽⁷⁹⁾

このように、朝鮮朝においては胥吏出身者や門蔭出身者の外官職への例調、および六品以上の「參秩」への進出が大きく制限されるようになっていたが、このことは、中世・高麗朝の官制から近世・朝鮮朝の官制への發展において、士庶の區別の意識——いわゆる「流品」の思想——が一層發達していったことを示している。

なお、『朝鮮王朝實錄』世宗二十二年（一四四〇）五月己未條にみえる吏曹への傳旨に、

今後、六品より五品を拜するに至る者は、守令を経るに非ずんば、「四品」に陞るを得ざれ。四品より從三品に至る者は、守令を経るに非ずんば、則ち陞りて「通訓」と爲るを得ざれ。通訓以上の、未だ守令を経ざる者は、隨宜

に除拜せよ。⁽⁸⁰⁾

とあるのは、このとき「四品以上」の上級官僚層（大夫）に昇進する前提として、中級官僚層（上士）に外官への例調を義務づけ、「二品以上」または「通訓大夫」（正三品堂上）以上の最上級官僚層（卿）に昇進する前提として、上級官僚層（大夫）に外官への例調を義務づけたことを示している。ただし、このような「例調」の制度は、必ずしも朝鮮・世宗朝に初めて設けられたわけではない。それはむしろ、高麗時代に久しく行われていた外官への例調の制度の再建にすぎないのである。

四 百官志の批判

ここまで忠烈王三十四年（一二三〇八）における官品構造の變革の事實について検証してきたが、これを前提として『高麗史』百官志の記述を検討してみると、前節に示した「外官職」の品秩の食い違いの問題以外にも、いくつか腑に落ちない點が浮かび上がってくる。

たとえば密直司（舊中樞院・樞密院）の官員の構成であるが、これは百官志の記述によると、高麗前期の文宗朝に次のように定められたことになっている。

文宗定むらく、判院事一人、院使二人、知院事一人、同知院事一人、秩並びに従二品。副使二人、簽書院事一人、直學士一人、並びに正三品。知奏事一人、左右承宣各一人、左右副承宣各一人、また正三品。堂後官二人、正七品。⁽⁸¹⁾
このうち「判院事」については、同じく百官志に、

（忠烈王）三十四年（一二三〇八）、忠宣罷む。即位するに及んで、これを復し、「判司事」を加置す。……恭愍王三年

(二三五四)、「判司事」・知申事・四代言は、みな祿官と爲す。⁽⁸³⁾

とあるが、忠宣朝にはじめて「加置」され、恭愍朝にようやく定員内の官職(祿官)となったはずの「判司事」(判密直司事)が、文宗朝の官制にすでに「判院事」(判中樞院事)として現れているのは疑わしい。

事實、『高麗史』食貨志、祿俸、文武班祿の條には、文宗三十年(二〇七六)の制度として、「中樞院使、〔知院事〕、同知院事」には「三百五十三石五斗」、「中樞院副使、簽書院事、中樞院直學士」には「三百石」を賜ることになっているが、ここには「判院事」(判中樞院事)は見えていない。⁽⁸⁴⁾

また、『高麗史』百官志、諸司都監各色、都評議使司の條には、

國初、都兵馬使と稱す。文宗、官制を定むらく、判事は侍中・平章事・參知政事・政堂文學・知門下省事を以てこれと爲し、使は「六樞密」および「職事三品以上」を以てこれと爲す。⁽⁸⁵⁾

とあるが、ここでも文宗朝における樞密院(中樞院)の宰相は、院使・知院事・同知院事・副使・簽書院事・直學士の「六樞密」を數えるだけで、「判院事」はこれに含まれていない。

更に、武臣執權期の文人、崔滋の『補閑集』によると、

宗室は「大誥」(大官誥)といえども、告を廷會に宣べず。故に「宣麻」に預からず。舊制、「樞密・僕射・八座・上將」は、並びに「小官誥」。近ごろ「樞密使」は始めて「宣麻」に預かる。⁽⁸⁶⁾

とあるから、「樞密使」は武臣執權期に入つてはじめて宰臣と等しく「大官誥」によって任命され、宰臣とともに「宣麻」の儀禮に預かるようになったわけである。この場合、「樞密使」の上位に「判院事」の官制が存在すれば、當然「判院事」も「大官誥」によって任命されていたことであろう。にもかかわらず、それが擧げられていないのは、「判院事」の官制が、この時期には定員として存在していなかったために他なるまい。⁽⁸⁷⁾

したがって文宗朝の官制に、「判院事一人、秩從二品」が置かれていたとする百官志の記述は誤りである。

また、『高麗史節要』卷二十三、忠宣王二年（二三一〇）八月條に、

密直司は二品に陞し、僉議府と同じく「兩府」と稱す⁽⁸⁸⁾。

とあるが、官司の品秩はその長官職の品秩によって定まるから、ここで密直司を二品に陞したというのは、その長官である「密直使」——忠宣王二年（二三一〇）のこの時点では「判司事」は存在するが、いまだ定員内の官職（祿官）ではない——の品秩を（三品から）二品に陞したことを示している。

宰樞を「兩府」と稱することは、實際には宋制の影響下に高麗前期から行われていたことであつたが、それは本當の意味で對等な「兩府」ではなかつた。「密直司」はこのときはじめて「二品」に陞秩したのであるから、それ以前には「三品衙門」であり、その長官である密直使（舊樞密院使）も「二品官」ではなく「三品官」であつたと考えなければならない。

したがって、忠宣王二年（二三一〇）以前の文宗朝の官制において、「院使二人、秩從二品」が置かれていたとする百官志の記述は誤りである。

更に、密直使（舊樞密院使）が忠宣王二年以前には「三品」（恐らくは「正三品」）であつたとすると、それより下位の「知院事・同知院事」が「從二品」であつたとする百官志の記述は當然受け入れることができなくなる。實際、高麗前期における「六樞密」の任官事例を検討すると、院使・知院事・同知院事はおおむね尙書（正三品）の兼職であり、副使・簽書院事・直學士はおおむね卿監（從三品）の兼職である⁽⁸⁹⁾。したがって、百官志の記述はすべて誤りである。

それにしても百官志の撰者は、一體なにを根據にこのような誤つた記述を導き出しているのであらうか。「判院事」が定員内の官職（祿官）になつたのは、前述のとおり、恭愍王三年（二三五四）のことであるが、その翌々年（恭愍王五年、

一三五〇には密直司を「樞密院」に改め、「員秩は並びに文宗の舊制に復した⁹⁰」というから、百官志が「文宗定むらく」として擧げている官制は、實際には「文宗の舊制に復した」と稱する「恭愍王五年」の官制を、無批判に文宗朝の官制として貼り附けているだけのことなのであろう。

なお、「文宗の舊制に復した」と稱する恭愍王五年の官制が、必ずしも文宗朝の舊を襲っていないことは、當時の文散階が四品以上を「大夫」とする事實ひとつを取ってみても明らかである。

次に、門下府（舊中書門下）の宰臣の構成について検討しよう。百官志では文宗朝の官制として、

門下侍中一人、秩從一品。

門下侍郎平章事・中書侍郎平章事各一人、秩正二品。

中書平章事・門下平章事（員數不定）、秩正二品。

參知政事一人、秩從二品。

政堂文學一人、秩從二品。

知門下省事一人、秩從二品。⁹²

が置かれたことになっている。しかし前述のとおり、密直司は忠宣王二年（一二三〇）に、はじめて二品に陞秩し、僉議府と同じく「兩府」と稱するようになったのであるから、逆に僉議府（舊中書門下）の方ははじめから「二品衙門」であり、その長官である僉議中贊（舊門下侍中）は、本來は「二品」（恐らくは正二品）であつたのではないかと考えられる。したがって文宗朝當時、門下侍中が「秩從一品」であつたとする百官志の記述は疑わしい。

事實、『高麗史』食貨志、田制、功蔭田柴、文宗三年（二〇四九）五月條に見える「兩班功蔭田柴法」の規定を見ると、中書門下の宰臣の官秩は必ずしも上記の百官志のとおりにはなっていない。

一品、門下侍郎平章事以上、田二十五結・柴十五結。

二品、參政以上、田二十二結・柴十二結。

三品、田二十結・柴十結。

四品、田十七結・柴八結。

五品、田十五結・柴五結。⁽⁹³⁾

ここでは「五品以上」の官員に「功蔭田柴」と稱する收租地（領地）を與え、これを子孫に遞傳することが認められているのであるが、「散官は五結を減ず」とあるから、ここでいう「一品」「二品」が、それぞれ「職事一品」「職事二品」を意味していることは自明である。したがって、「一品、門下侍郎平章事以上」「二品、參政以上」とあるのは、それぞれ

職事一品官、および（職事二品官のなかの）門下侍郎平章事以上

職事二品官、および（職事三品官のなかの）參政以上

という意味に解釋するのが妥當であろう。⁽⁹⁴⁾

この場合、「門下侍郎平章事以上」というのは、具體的には中書門下の宰臣である「門下侍中」「門下侍郎・同中書門下平章事」「門下侍郎・平章事」のことで、これらはすべて一品官に準じる待遇を受ける「二品官」であつたと考えられる。また「參政以上」というのは、中書門下の宰臣である「中書侍郎・平章事」と「參知政事」のことで、このうち「中書侍郎」は「門下侍郎」と同じく二品官であるが、「參知政事」は「二品」に準じる待遇を受ける「三品官」であつたと考えることができるであらう。⁽⁹⁵⁾

實際、高麗前期における「參知政事」の任官事例を見ると、そのほとんどは「六部尙書」（正三品）を以て「參知政

事」を兼帶するか、または「尙書左右僕射」(從二品)をもつて「參知政事」を兼帶するかのいずれかである。⁽⁹⁶⁾ また參知政事に任命されるものは、高麗前期ではおおむね「銀青光祿大夫」(正三品)の文散官を與えられている(後述)。したがって、『高麗史』百官志が述べるように「參知政事」が「秩從二品」であつたと考えるよりは、むしろ「職事三品以上」の僕射・尙書が中書門下の議事に加わる場合に「參知政事」の職名を兼帶し、そのことによつて「職事三品官」より一等上の「職事二品官」に準じる待遇を與えられていたと考へた方がわかりやすい。

更に、參知政事が「職事三品」以上の兼職であつたとすると、それより下位の宰臣である「政堂文學」「知門下省事」についても、それらが「秩從二品」であつたとする百官志の記述は受け入れることができなくなる。事實、高麗前期の任官事例を検討すると、「政堂文學」「知門下省事」を兼帶しているのはおおむね「僕射」(從二品)、「尙書」(正三品)、「卿監」(從三品)クラスの官人であるから、⁽⁹⁷⁾ これらは「職事三品以上」の官人が兼帶する宰臣職——ただし、「參知政事」に就任するには若干履歷の浅い官人の兼帶する宰臣職——といふことができるであらう。

したがつて、百官志が「門下侍中」を「秩從一品」とし、「參知政事」「政堂文學」「知門下省事」を「秩從二品」と規定しているのは、いずれも誤りである。これらも要するに、「文宗の舊制に復した」と稱する恭愍王五年(二三五六)の官制を、そのまま文宗朝の官制として貼り附けているだけのことなのであらう。

では、恭愍王五年(二三五六)の官制において、なぜ「宰樞」の官秩は「二品」以上に引き上げられているのであるか。いうまでもなく、それは忠烈王三十四年(二三〇八)における官品構造の變革の事實に對應して引き上げられているのである。

前述のとおり、高麗前期の官制において、「參知政事」「政堂文學」「知門下省事」や「六樞密」は、いずれも「職事三品以上」の兼帶職として位置づけられていた。たとえば、宰樞によつて構成される「都兵馬使」は、

判事は侍中・平章事・參知政事・政堂文學・知門下省事を以てこれと爲し、使は六樞密および職事三品以上を以てこれと爲す。⁽⁹⁸⁾

と規定されていたが、ここで「六樞密」と「職事三品以上」とが同等の扱いになっているのも、「六樞密」が「職事三品以上」の兼帶職であったことを考えれば納得がいく。

そもそも官品構造の變革以前において、宰臣・樞密は「三品以上」の「卿」階層から選拔されていたのであるが、そのことは、宰樞の兼帶する位階（文散官）のあり方から見ても明らかであろう。

從來、「卿」階層の位階は、開府儀同三司（從一品）、特進（正二品）、金紫光祿大夫（從二品）、銀青光祿大夫（正三品）、光祿大夫（從三品）の五階に分かれていたが、このうち、樞密院の宰相は、通常、「銀青光祿大夫」（正三品）の位階を與えられ、中書門下の宰臣は、通常、「金紫光祿大夫」（從二品）の位階を與えられている。幾つか具體例を挙げると、

柳光植は高宗元年（一二二四）に「銀青光祿大夫・樞密院副使・判閣門事」として樞密院の宰相に昇進し、その後、

「金紫光祿大夫・知門下省事・尙書右僕射・判三司事」として中書門下の宰相に昇進した（『高麗墓誌銘集成』一七〇、

柳光植墓誌銘）。⁽⁹⁹⁾

鄭邦輔は「銀青光祿大夫・樞密院副使・右散騎常侍」として樞密院の宰相に昇進し、高宗二年（一二二五、今上即位三年）に、「金紫光祿大夫・知門下省事・尙書左僕射・判戸部事」として中書門下の宰相に昇進した（『高麗墓誌銘集成』一七五、鄭邦輔墓誌銘）。⁽¹⁰⁰⁾

琴儀は康宗二年（一二二三）に「銀青光祿大夫・簽書樞密事・左散騎常侍・翰林學士承旨」として樞密院の宰相に昇進し、高宗二年（一二二五）に「金紫光祿大夫・政堂文學・左僕射・寶文閣大學士・修國史」として中書門下の宰相に昇進した（『高麗墓誌銘集成』一八一、琴儀墓誌銘）。⁽¹⁰¹⁾

李奎報は高宗二十年（一二三三）六月に「銀青光祿大夫・樞密院副使・右散騎常侍・寶文閣學士」として樞密院の宰相に昇進し、同年十二月に「金紫光祿大夫・知門下省事・戸部尙書・集賢殿大學士・判禮部事」として中書門下の宰相に昇進した（『高麗墓誌銘集成』一八八、李奎報墓誌銘）。

元傳は元宗十年（一二六九）に「銀青光祿大夫・樞密院副使・右常侍・翰林學士承旨」として樞密院の宰相に昇進し、翌年夏に「金紫光祿大夫・政堂文學・吏部尙書・寶文閣大學士・同修國史・判三司事・太子少保」として中書門下の宰相に昇進した。（『高麗墓誌銘集成』一九八、元傳墓誌銘）

以上はいずれも「銀青光祿大夫」（正三品）を以て樞密院の宰相となり、「金紫光祿大夫」（從二品）を以て中書門下の宰相となった事例であるが、このような事例は特に武臣執權期以降に集中して存在する。一方、それ以前においては、「銀青光祿大夫」を以て「參知政事」「政堂文學」などの中書門下の宰相に昇進する事例が少なくない。たとえば、

尹彥頤は毅宗二年（一二四八）に「銀青光祿大夫・政堂文學・判尙書刑部事」として中書門下の宰相に昇進した

（『高麗墓誌銘集成』五六、尹彥頤墓誌銘）

崔梓は「銀青光祿大夫・檢校司徒・守司空・尙書左僕射・參知政事・判禮部事」を加えられて中書門下の宰臣に昇進した（『高麗墓誌銘集成』六十、崔梓墓誌銘）。

崔惟清は「銀青光祿大夫・尙書左僕射・參知政事」を以て中書門下の宰相に昇進した（『高麗墓誌銘集成』一一五、崔惟清墓誌銘）。

金純は明宗二十四年（一二九四）正月に「銀青光祿大夫・參知政事・禮部尙書」を以て中書門下の宰相に昇進した（『高麗墓誌銘集成』一四五、金純墓誌銘）。

以上のように、「參知政事」や「政堂文學」は高麗前期には「銀青光祿大夫」（正三品）を以て任命されている例が少

なくない。この點について、『高麗墓誌銘集成』一六八、崔忠獻墓誌銘によると、

これより以後、年ごとに除せられ歳ごとに遷り、階は「金紫光祿大夫」(從二品)に至る。……本朝の舊制に、階・功・郷・職のここに至るは、必ず「宰府」に陞る者を待つて然る後にこれを授く。⁽¹⁰⁾

とあるから、中書門下の宰相のなかでも特に平章事以上の「眞宰」の位階は、高麗前期においては從二品の「金紫光祿大夫」を與えることが慣例となっていたようである。逆に言うと、「參知政事」や「政堂文學」などの「執政」は、眞の意味での宰相(眞宰)とは認められず、したがって、その位階も「銀青光祿大夫」(正三品)に止まるものが少なくなかった。

禮儀詳定所、奏して曰く、「近來、朝廷の間に行する所の表狀書簡は、稱號正しからず。名を正す所以の義にあらず。臣等慾し望むらくは、諸王は『令公』と曰い、中書令・尙書令は『太師』『令公』と曰い、兩府執政官は『太尉』『平章』『司空』『參政』『樞密』『僕射』と曰い、おのおの時職に隨いてこれを稱し、三品以下の員寮は、並びに『相公』と稱するを得ざれ。宜しく直に官名を呼ぶべし」(『高麗史』卷八十四、刑法志一、職制、公牒相通式、睿宗九年六月條)。⁽¹¹⁾

睿宗九年(一一一四)の右の史料では「兩府執政官」と「三品以下員寮」とが對比して述べられているから、「兩府執政官」、すなわち宰樞は「二品以上」によって構成されていた、というのが舊來の通説である。⁽¹²⁾しかし前述のとおり、この時期には「參知政事」「政堂文學」「知門下省事」や「六樞密」はいずれも「三品」であつたから、「三品以下員寮」というのは、「宰樞」を兼ねているものを除いた他の一般の「三品以下員寮」という意味にすぎない。宰臣が一律に「金紫光祿大夫」(從二品)の位階を受けるようになるのは、武臣執權期も後半に入つて以後のことであろう。

このように、樞密院使、知院事、同知院事、樞密院副使などの樞密院の宰相には、通例、「銀青光祿大夫」(正三品)

の位階が與えら、また中書門下の宰相のなかでも、參知政事、政堂文學、知門下省事などの「執政」には「銀青光祿大夫」(正三品)の位階が與えられていたから、それらは「官位相當」⁽¹¹⁾の原則からいって、おおむね「職事三品官」として位置づけられていたのである。そうして「平章事」以上の「眞宰」には「金紫光祿大夫」(從二品)の位階が與えられていたから、それらは「官位相當」の原則によって「職事二品官」として位置づけられていた。もともと、高麗前期においては「官位相當」の原則はかなり形骸化し、一般には職事官の昇進が文散官の昇進を上回っていたが、少なくとも「宰樞」に昇進したものについては、「銀青光祿大夫」(正三品)もしくは「金紫光祿大夫」(從二品)の位階を與えることで、最終的に「官位相當」の形式を整えていたのであろう。

これに對し、官品構造の變革以後には「宰樞」の兼帶する位階はすべて「二品」以上に引き上げられている。たとえば「匡靖大夫」(舊金紫光祿大夫)は「從二品」から「正二品」に引き上げられ、「中議大夫」(舊銀青光祿大夫、後に通憲大夫、また奉翊大夫と改稱)は「正三品」から「從二品」に引き上げられているのである。⁽¹²⁾

前述のとおり、密直司が「二品」に引き上げられたのは、忠烈王三十四年(一三〇八)における官制改革の翌々年、忠宣王二年(一二二〇)のことであったが、これは「官位相當」の原則に基づいて宰臣の位階を「匡靖大夫」(正二品、樞密の位階を「中議大夫」(從二品)と定め、僉議府(舊中書門下)と密直司(舊樞密院)をそれぞれ「二品衙門」として位置づけることで、両者がいわゆる「兩府」を構成するという原則を示しているのであろう。そうして從來「三品官」であった「參知政事」「政堂文學」「知門下省事」「六樞密」などの官秩は、この原則に基づいて、このときはじめて「二品官」に引き上げられたのだと考えられる。⁽¹³⁾

したがって、『龍飛御天歌』第一百六章の注に、

高麗の時、二品以上は、樞密院の堂上官と爲るを得。故に二品を拜する者は、これを「入樞」と謂う。⁽¹⁴⁾

とあるのは、官品構造の變革以後の話である。また、『高麗史』刑法志、職制、公牒相通式、忠烈王二十四年（一二九八）五月條、忠宣王即位の敕に、

朝廷の間に於いて尊稱を僭越するものあるは、實に禮にあらざるなり。宰執、諸の二品官は、諸籤には『令公』を除き、寒暄（時候の挨拶）には『鈞旨』『鈞侯』と稱せよ。諸の三品は、職に隨いてこれを稱し、寒暄には『臺旨』『臺侯』と稱し、率りて以て常と爲せ。違ふものは、治するに法を以てせよ。⁽¹⁸⁾

とあるのは、必ずしも實行はされなかつたようであるが、「宰執、諸の二品官」を「宰相」として位置づけている點において、その後の忠烈王三十四年（一二〇八）における官品構造の改革の先驅を爲す。そうして官品構造の改革以後には、「二品以上」はすべて「宰相」と呼ばれるようになったが、この點については既に引用した『朝鮮王朝實錄』世宗二十一年正月丙午條に、

然れども「二品以上」は、豈に總じてこれを「宰相」と謂うべけんや。變理輔相の位に居る者にして、乃ち眞の宰相なり。高麗の季、乃ち樞密以上を以てみな「宰相」と稱す。はなはだ謂れなきなり。⁽¹⁹⁾

とあるのがその證據である。

從來、上記の諸史料を根據として、高麗では「二品以上」が「宰樞」を構成したといわれてきた。しかしそれは官品構造の變革以後の話であつて、それ以前について言えば、宰樞は「三品以上」の「卿」階層のなかから選拔されていたのである。

おわりに

以上、本稿では高麗忠烈王三十四年（一二〇八）における官品構造の變革の事實を指摘し、その事實の意味するところについて幾つかの側面から考察を加えてきたが、結論として述べ得ることは、おおむね次の三點に纏められる。

一、官品構造の變革は、上國元朝の官制との整合を意圖して行われたこと。

一、それは位階（散官）の陞降と同時に官職（職事官）の陞降を伴い、その過程で冗官の淘汰や士庶の區別の強化

——いわゆる「流品」の整飾——が圖られたこと。

一、『高麗史』百官志の記事の一部、特に外官職や宰樞職の記事には、官品構造の變革以後の事實をそれ以前の事實として誤って記述している事例が見られること。

このうち、私が最も強調しておきたいことは、從來、だれも本格的な批判を試みようとしなかった百官志の記事について、これを官品構造の變革という視座から検討しようとする第三の論點である。

言うまでもないことであるが、高麗官僚制度史の研究において、『高麗史』百官志は最も重要な典據史料の一つである。百官志がなければ官僚制度の研究それ自體が成り立たないといっても過言ではない。したがって、この典據史料を根據もなく批判することは慎まなければならないが、その内容に明らかな矛盾があれば、それは内的・外的な文獻批判を通して克服していかなければならない。

百官志における最も重大な限界の一つは、それが高麗末期、恭愍朝の戰亂による文獻散佚の後を受けて編纂された私撰の政書——金社（字敬叔）の『周官六翼』——の内容を踏襲しているところにあると考えられる。百官志の内容すべ

てが『周官六翼』に由來するわけではないにしても、おそらくその主要部分は『周官六翼』の引き寫しであろう。たとえば本稿で問題とした外官職の品秩についても、『朝鮮王朝實錄』の次の記事は、それが『周官六翼』の引き寫しであったことを強く示唆しているのである。

吏曹啓すらく、「外官の品秩は、請うらくは『周官六翼』に依りて、從二品は留守官、正三品は大都護府・牧官、從三品は都護府、從四品は知郡事、從五品は判官・縣令、從六品は縣監とせん」と。これに従う（『朝鮮王朝實錄』

世宗十三年正月丁丑條）。

右の内容は『高麗史』百官志の外官職の記載内容とほとんど合致している。現行『高麗史』が成立する以前の「世宗十三年」（一四三二）の段階において、「外官の品秩」に關する第一の參考資料が『周官六翼』であつたとすれば、その内容が『高麗史』百官志の編纂過程にそのまま引き繼がれていったことは當然であろう。

しかし高麗末期の人である金社には、忠烈王三十四年（一三〇八）の段階で官品構造の變革が行われた事實が充分には認識されていなかったし、また高麗前期における中書省・門下省と、宰相府である「中書門下」の關係なども充分には認識されていなかったようである。このため、百官志では高麗前期の段階において、すでに「中書門下省」という單一の衙門が存在し、それが忠烈朝に入つて「僉議府」に改められたかのように記述されているが、實際には中書省と門下省とはそれぞれ別個の衙門として存在し、それが忠烈王元年（一二七五）の段階で「僉議府」に改められたのである。そうしてこの僉議府の堂上が、宰相府としての「中書門下」の機能を引き繼ぐことになったのである。

一方、「文宗の舊制」に復することを標榜した恭愍王五年（一三五六）の官制では、この「僉議府」（後に都僉議司）は「中書門下省」に改められているが、「中書門下省」という單一の官廳が成立したのはこのときが初めてであつて、それ以前には「中書省」「門下省」「中書門下」は存在しても「中書門下省」という官廳は存在しなかった。ところが百官志

はこれを「文宗朝」に、つとに存在した官廳として記述しているのである。恐らくは百官志の記述の基になった金社の『周官六翼』それ自體が、恭愍王五年の官制を基準に、それを投影した形で「文宗朝」の官制を記述していたのであるう。

もちろん、百官志のすべてが信頼できないというわけではない。大切なのは、そのどの部分を信頼し、どの部分を批判すべきかということである。この點において、本稿が提起した忠烈王三十四年における官品構造の變革の事實は、ひとつの有効な判斷基準となるであらう。

注

- (1) 『唐律疏議』卷一、名例條。八議。【疏】議曰、依令、「有執掌者爲職事官、無執掌者爲散官。」
- (2) 『辭海』（合訂本、一九四七年初版）、流品の項に、「流謂派別、品謂等第、因稱人物之高下曰流品」とある。
- (3) 『唐六典』卷四、尙書禮部、禮部郎中條。凡百僚冠笏（注略）珂珮（注略）、各有差。凡常服、亦如之。「親王、三品已上、一王後、服用紫、飾以玉。五品已上、服用朱、飾以金。七品已上、服用綠、飾以銀。九品已上、服用青、飾以鍮石。流外・庶人、服用黃、飾以銅鐵」。
- (4) 『宋史』卷一百五十三、輿服志五、諸臣服下、公服條。凡朝服、謂之具服。公服從省、今謂之常服。宋因唐制、三品以上服紫、五品以上服朱、七品以上服綠、九品以上服青。其制、曲領大袖、下施橫欄、束以革帶、幘頭、烏革鞵。自王公至一命之士、通服之。
- (5) 『唐律疏議』卷一、名例條。八議、……六曰議貴「謂職事官三品以上、散官二品以上、及爵一品者」。
- (6) 『唐六典』卷二、尙書吏部、吏部郎中條。凡叙階之法、有以封爵（注略）、有以親戚（注略）、有勳庸（注略）、有以資蔭「謂一品子、正七品上叙。至從三品子、遞降一等。四品・五品、有正從之差、亦遞降一等。從五品子、從八品下叙。國公子、亦從八品下。三品以上、蔭曾孫。五品已上、蔭孫。孫降子一等。曾孫降孫一等。……」。
- (7) 『唐律疏議』卷二、名例條。諸應議・請・減、及九品以上之官、若官品得減者之祖父母・父母・妻・子孫、犯流罪以下、聽贖。【疏】議曰、此名「贖章」。……若官品得減者、謂七品已上之官、蔭及祖父母・父母・妻・子孫、犯流罪以下、竝聽贖。
- (8) 文宗八年（一〇五四）、命有司、選三品官之孫、五品以上官之子二十人、爲東宮侍衛公子。五品官之孫、七品以上官之子十人、爲侍衛給使、永爲定制。
- (9) 『高麗史』卷七十四、選舉志二、學校條。仁宗朝、式目都監詳定學式。國子學生、以文武官三品以上子孫、及勳官二品帶縣公以上、

- (10) 『高麗史』卷六十三、禮志五、吉禮小祀、大夫士庶人祭禮。恭讓王二年（一三九〇）二月判。大夫以上、祭三世。六品以上、祭二世。七品以下、至於庶人、止祭父母。竝立家廟。朔望必奠、出入必告、四仲之月必享、食新必薦、忌日必祭。當忌日、不許騎馬出門、接對賓客。其俗節上墳、許從舊俗。時享日期、一二品、每仲月上旬。三四五六品、仲旬。七品以下、至於庶人、季旬。
- (11) 同右。八月庚申朔、頒行士大夫家祭儀。……行禮儀式、一依『朱文公家禮』、隨宜損益。一品至二品、設蔬果各五樣。肉二樣。麪餅各一器。羹飯各二器。匙筋盞各二。三品至六品、設蔬菜三樣、果二樣、麪餅魚肉各一器。七品至庶人在官者、菜二樣、果一様、魚肉各一器、羹飯匙筋竝同。兩位共一卓。
- (12) 『禮記』祭法。大夫立三廟・二壇。曰考廟、曰王考廟、曰皇考廟。享嘗乃止。顯考祖考無廟。有禱焉、爲壇祭之。去壇爲鬼。適士、二廟・一壇。曰考廟、曰王考廟。享嘗乃止。皇考無廟、有禱焉、爲壇祭之。去壇爲鬼。官師一廟。曰考廟。王考無廟、而祭之。去王考爲鬼。庶士・庶人無廟、死曰鬼。
- (13) 『禮記』祭法、陳澧注。適士、上士也。天子上中下之士、及諸侯之上士、皆得立二廟。
- (14) 『禮記』祭法、陳澧注。官師者、諸侯之中士・下士、爲一官之長者、得立一廟。
- (15) 『朝鮮王朝實錄』世宗十三年（一四三二）五月戊辰條。詳定所啓、「丁酉（太宗十七年、一四一七）六月日受教內、『以三品以上爲大夫、四品以下爲士。』今考古制、中朝以六品以上爲大夫、七品以下爲士。本朝五品、亦准中朝七品。請以四品以上稱爲大夫、五品以下稱爲士。」從之。
- (16) 『宋史』卷一百五十三、輿服志五、諸臣服下、公服條。（神宗）元豐元年（一〇七八）、去青不用。階官至四品服紫、至六品服緋、皆象笏、佩魚。九品以上則服綠、笏以木。
- (17) 同右。中興、仍元豐之制、四品以上紫、六品以上緋、九品以上綠。服緋紫者、必佩魚、謂之章服。
- (18) 同右。（紹興）三十二年（一一六二）六月、孝宗即位、詔承務郎以上、服緋・綠及十五年者、竝許改轉服色。……先是、殿中侍御史張震奏、「……且改轉服色、常敎、自升朝官以上、服綠、大夫以上、服緋、花事及二十年、方得改賜。……」
- (19) 『金史』卷五十五、百官志一、吏部條。
- (20) 『元史』卷九十一、百官志七、文散官條。
- (21) 『明史』卷七十二、職官志一、吏部條。
- (22) 『高麗史』卷七十二、輿服志一、百官祭服條。恭愍王十九年五月、太祖高皇帝、賜群臣陪祭冠服。比中朝臣下九等、遞降二等。王國七等。……第一等、秩比中朝第三等、服五梁冠・革帶銀鉤・紫錦綬・銀環。第二等、秩比中朝第四等、服四梁冠、餘同前。第三等、秩比中朝第五等、服三梁冠・革帶・銅鉤・紫錦綬・銅環。第四等・第五等、秩比中朝第六等・第七等、服二梁冠・赤錦綬・銅環。第六等・第七等、秩比中朝第八等・第九等、服一梁冠・綠錦綬・銅環。
- (23) 『明史』卷六十七、輿服志三、外國君臣冠服條。洪武二年、高麗入朝、請祭服制度。命製給之。……宣德三年（世宗十年）、朝鮮國王李祹（世宗）言、「洪武中、蒙賜國王冕服九章。陪臣冠服、

(24) 比朝廷、遷降二等。故陪臣一等、比朝臣第三等、得五梁冠服。永樂初、先臣芳遠(太宗)、遣世子禔入朝、蒙賜五梁冠服。臣竊惟、世子冠服、何止同陪臣一等、乞爲定制。」乃命製六梁冠、賜之。
 『高麗史』卷七十六、百官志一、藝文館條。(忠烈王)三十四年、忠宣併文翰・史官、爲藝文春秋館、仍以右文館・進賢館・書籍店併焉。

(25) 『元史』卷四、世祖本紀、中統二年七月癸亥條。初立翰林國史院。『元史』卷五、世祖本紀、至元元年九月壬申朔條。立翰林國史院。『尙書』虞書・皋陶謨、「日宣三德、夙夜浚明、有家。」孔穎達疏「大夫受采邑、賜氏族、立宗廟、世不絕祀。故稱家。」

(26) 『通典』卷十五、選舉三、歷代制下、大唐。其選授之法、亦同循前代。凡諸王及職事正三品以上、若文武散官二品以上、及都督・都護・上州刺史之在京師者、冊授(注略)。五品以上、皆制授。六品以下、守五品以上、及視五品以上、皆敕授。凡制敕授、及冊拜、皆宰司進擬。

(27) 『唐六典』卷一、尙書吏部、吏部郎中條。凡應入三品・五品者、皆待別制而進之、不然則否「……竝所司勸責訖、上中書門下重勸訖、然後奏聞、別制以授焉。」

(28) 『唐六典』卷一、尙書吏部、吏部尙書・侍郎條。凡選授之制、每歲孟冬、以三旬會其人。……以三銓分其選。一曰尙書銓。二曰中銓。三曰東銓。……然後據其狀以覈之、量其資以擬之。五品已上、以名聞、送中書門下、聽制授焉。六品已下常參之官、量資注定。其才識頗高、可擢爲拾遺・補闕・監察御史者、亦以名送中書門下、聽敕授焉。其餘、則各量資注擬。……凡三銓注擬訖、皆當銓團甲、以過左右丞相。若中銓・東銓、則亦先過尙書訖、乃上門下省。給事中讀、黃門侍郎省、侍中審、然後進甲以聞「若尙書・丞相・門下批「官不當」者、則改注、亦有重執而上者」。

(29) 『高麗史』卷七十一、輿服志一。毅宗朝詳定。文官四品以上、服

(30) 紫、紅綬、佩金魚。常參六品以上、服緋、紅綬、佩銀魚。官未至而特賜者、不拘此例。九品以上、服綠。閣門班、武臣、皆紫、而不佩魚。內侍・茶房等官、除本服外、亦皆紫、而不佩魚。拙稿「高麗官僚制度の概観——外官への例調を中心に——」(『東洋史研究』第四十九卷第一號、一九九〇年六月、京都、東洋史研究會、一三三—一三三頁。

(31) 『高麗墓誌銘修成』二〇二、俞克諸墓誌銘。銘曰、……位登六品、雖然、以公之德也、以公之才也、宜爲榮顯達官、而反低回於青衫之秩、吾不足謂之官也。

(32) 『高麗史』卷七十五、選舉志三、銓法、凡選法。(神宗)五年四月、式目都監使崔誥等奏、「文班參外五六品、竝令帶犀、爲參秩。」王曰、「員數太多、豈可一時陞秩。」乃增參秩六七人。(※この時、具體的には監察御史(權知、從六品)二人、閣門祗候(權知、正七品)文吏各三人、大廟署令(從五品)、諸陵署令(從五品)などが「參秩」に陞されている(『高麗史』百官志)。

(33) 『高麗史』卷七十一、輿服志一、冠服通制條。忠烈王元年(一二七五)七月、定朝官服章。宰樞以上、玉帶。六品以上、犀帶。七品以下、黑帶。

(34) 『高麗史』卷七十一、輿服志一、公服條。毅宗朝詳定、……凡帶、……文武四品以下常參官、金塗銀犀。閣門通事舍人以下、祗候以上、金塗銀。參外官、不許着犀。

(35) 犀秩の用例——『高麗墓誌銘集成』二二一、權阻墓誌銘。嘗有物外想。大人以多方勤留、要附克家之任。於甲寅(高宗四十一年、一二五四)、求爲門下錄事。公不得已、就焉。往時是職、衣冠中有巨產者、令子增當之。蓋經費煩重、而超拜犀秩、不循魚貫故也。『高麗史』卷七十一、輿服志一、冠服通制條。(辛禍)十三年(一三八七)六月、始革胡服、依大明制。自一品至九品、皆服紗帽・團領。其品帶、有差。一品重大匡以上、鍍花金帶。二品兩府以上、

- (38) 素金帶。自開城尹及三品大司憲至常侍、級花銀帶。判事至四品、素銀帶。五六品至七品、門下錄事・注書、密直堂後、三司都事、藝文春秋館・典校寺・成均館八九品、外方縣令・監務、角帶。東西班七品以下、氈帽・絲帶。
- (39) 犀帶とは犀の角を象嵌した帶、角帶というのは犀角に換えて、恐らくは牛角を象嵌した帶のことであろう。餘談であるが、新羅時代の官位である「角干」は、或は「舒發翰」「舒弗邯」ともいっただから、「角」とは「斗」すなわち「牛の角」を意味したのである。
- (40) 『高麗史』卷七十五、選舉志三、銓注、凡選法、恭愍王五年六月條。教曰、「政房設自權臣、豈爵人於朝之意。今宜永罷。其三品以下、與宰相共議進退。七品以下、吏兵部擬議奏聞。」（*『禮記』王制、爵人於朝、與士共之。）拙稿「高麗時代の銓選と告身」（『東洋史研究』第五十九卷第二號、二〇〇〇年九月、京都、東洋史研究會）、參照。
- (41) 『高麗史』卷七十六、百官志一、成均館條、參照。
- (42) 具體的には、尙食局（司膳署）、尙藥局（掌醫署）、尙衣局（掌服署）、尙舍局（司設署）、尙乘局（奉車署）の直長（正七品）などがこれに當たる。『高麗史』卷七十七、百官志二、參照。
- (43) 『禮記』祭法、疏。「官師一廟」者、謂諸侯中士・下士也。謂爲官師者、言爲一官之長也。一廟、祖禰共之。又無壇也。
- (44) 朝鮮初期の法制において、「本系常人」の官人は官人一般に認められてゐる「收贖」の恩典を與えられない場合があつた（拙稿「朝鮮初期の笞杖刑について」『史林』第八十二卷第二號、一九九九年三月、京都、史學研究會）。ここで「本系常人」というのは、「世族」にあらずして「卑官」に仕える、「西班八品、東班九品以上」の人のこと（『朝鮮王朝實錄』世宗十二年四月癸未條）であるが、こうした官界における「世族」と「本系常人」との區別の意識は、當然、高麗王朝時代にまで遡るものであろう。
- (45) 拙稿「高麗睿宗朝における意思決定の構造」（『史林』第七十六卷第二號、一九九三年三月、京都、史學研究會）
- (46) 『高麗史』卷八十、食貨志三、祿俸、致仕官條によると、致仕官祿を受けるのは文班では「五寺三監等官の卿監」（從三品）以上、武班では「大將軍」（從三品）以上で、これらは最高諮問會議の構成員と合致する。
- (47) 拙稿「高麗時代の宰相制度——合坐制とその周邊——」（『朝鮮學報』第百八十九輯、二〇〇三年十月、天理、朝鮮學會）
- (48) 『高麗史』卷三十三、忠宣王世家、忠烈二十四年五月辛卯條。教曰、「……惟宰執之數、倍於古制、公家議論、多少異同、事事稽滯、宜當減省。」
- (49) 『龍飛御天歌』第一百六章、注。高麗時、二品以上、得爲樞密院堂上官。故拜二品者、謂之入樞。
- (50) 『朝鮮王朝實錄』世宗二十一年正月丙午條。……或謂、不可以宰相之職、授野人。然二品以上、豈可總謂之宰相哉。居變理輔相之位者、乃眞宰相也。高麗之季、乃以樞密以上、皆稱宰相、甚無謂也。
- (51) 『高麗史節要』卷四、文宗元年十一月條。吏部奏、「伏准宣旨、凡内外大小衙門官員、皆減一人、惟巡邊官司、仍舊。今伏審、西・山・南道州牧、務劇員少、事多壅滯、甚爲不便。請嶽牧州府員數、並令仍舊、永爲定制。」從之。（*この史料によると、文宗朝の初年に「内外大小衙門官員」がそれぞれ一人ずつ削減されてゐる。ここでは「嶽牧州府員數」は舊額に復したことになるが、その後、やはり削減されようで、一般には長官職（使）が空闕となつてゐる。）
- (52) 『高麗墓誌銘集成』五六、尹彦頤墓誌銘。十二月、加禮部員外郎・知制誥。甲辰、爲禮部郎中、賜緋魚袋。是日、出守全州牧。

丙午、應詔赴闕。十二月、歷戶部員外郎・知制誥、改右司諫、餘如故。

(53) 『高麗墓誌銘集成』七一、鄭復卿墓誌銘。今上(毅宗)御宇、除試戶部員外郎。以禮部郎中、出守尙州、入歷戶禮部員外郎、除試軍器少監、賜紫金魚袋。

(54) 『高麗墓誌銘集成』七三、尹誦墓誌銘。睿宗天慶二年壬辰、以戶部員外郎、出守廣州牧。居三年、春、以禮部員外郎・知茶房事、還。

(55) 『高麗墓誌銘集成』七六、李軾墓誌銘。拜侍御史・右司郎中。戊午年、出守廣州牧。居一年、改知南京留守、秩滿、入爲吏部郎中、兼太子洗馬。

(56) 『高麗墓誌銘集成』一〇七、金永錫墓誌銘。驟加刑部員外郎。冬、加試禮部郎中、出守清州牧。及丙午歲、會李氏事起、以姻親故、降授兵部員外郎・知制誥。

(57) 『高麗墓誌銘集成』九十、文公裕墓誌銘。己酉(仁宗七年、一一二九)冬、以禮部郎中、爲清州牧副使。未考績、宣召、授左司員外郎、充史館修撰官。

(58) 『高麗史』卷七、文宗世家、元年冬十月庚申條。晉州牧使・司宰卿崔復圭、招安通民一萬三千餘戶、復其業。王嘉獎之。

(59) 『高麗墓誌銘集成』十六、任懿墓誌銘。壽昌二年(肅宗元年、一〇九六)、以攝司宰卿、出爲全州牧使、理有聲。入拜大僕卿・諫議大夫。

(60) 『宣和奉使高麗圖經』卷八、人物、序。……今使者入境、皆擇臣屬通敏者、附以將迎之禮。以州牧、則有若刑部侍郎・知全州吳俊和、禮部侍郎・知(青)州洪若伊、戶部侍郎・知廣州陳淑。『朝鮮王朝實錄』世宗九年二月辛巳條。吏曹啓、「前朝舊制、牧官・府官、或差四品、稱『副使』。其後皆以三品以上充差、國初因之。自立中外官吏久任循資之法、三品數少、當除授之際、職次

相當者、蓋寡。請依國初之制、牧・都護府、如無三品、以四品差遣、稱『副使』」從之。

(62) 『高麗史』卷一百十、李齊賢傳。刺史・守令、得其人、則民受其福、不得其人、則民遭其害。官高而降爲者、僣肆不遵法。年邁而求得者、昏懦不任事。或以請調、起墮畝、垂金魚者、又不足言也。請如古制、朝士之未入參者、必經監務・縣令、至于四品、例爲牧守、而監察司・按廉使、必行褒貶、爲之賞罰。所謂官高者、年邁者、用請調、起墮畝者、如不得已、寧授京官、勿與親民之任。行之二十年、流亡不復、貢賦不足、未之有也。

(63) 『拙菴千百』(前田・尊敬閣文庫藏、ソウル、亞細亞文化社影印本)『高麗墓誌銘集成』四七、金誠墓誌銘。以功調典厩令(從七品)、遷大府注簿(從七品)。本朝用人、凡官至七品者、皆遣守知州。以故、公亦出刺寶城郡。秩滿、爲將作注簿(從七品)。

(64) 『高麗史』卷一百三十一、叛逆五、奇轍傳。……父子敖、蔭補散員、累遷總部散郎、出守宣州、年六十三、卒。

(65) 『高麗墓誌銘集成』二六五、金永暉墓誌銘。再遷掖庭內謁者監、出知陝州事。……秩滿、除職(府)散郎。

(66) 『高麗墓誌銘集成』二七二、朴元桂墓誌銘。庚申(忠肅王七年、一三三〇)夏、轉都官散郎。泰定甲子(忠肅王十一年、一三三二)夏、以開城少尹、知寶城郡事、有惠政。至順壬申(忠肅王後元年、一三三三)、授通禮門判官。

(67) 『高麗墓誌銘集成』二八四、李齊賢墓誌銘。瑞原郡夫人徐氏、通直郎・知瑞州事、諱仲麟之女。生二女。

(68) 『高麗墓誌銘集成』一五七、張允文墓誌銘。耽羅縣、在海中、……授公以大府注簿、爲縣令、以撫其民。……秩滿、拜諸陵丞・兼都兵馬錄事。

(69) 『高麗墓誌銘集成』一五九、李瑞林墓誌銘。二年、遷八品官。是

時、晉康侯（崔忠獻）持國□□□（牛）峯置縣令。叔制之初、求前有成績者。君被□□□邊而加仁愛、大爲晉康知獎。入爲中書注書。

(71) 『高麗墓誌銘集成』一七九、庚資諒墓誌銘。年若干、以宰相子、直補守宮署丞、尋遷大樂署丞、俄出爲龍岡縣令。

(72) 『高麗墓誌銘集成』二〇八、崔瑞墓誌銘。丙辰秋、爲祕書校勘。中統元年、出爲處仁縣令。四年十二月、入爲大官丞、仍帶式目錄事。

(73) 『高麗史』卷一百十、李齊賢傳。忠穆襲位、進判三司事、封府院君。上書都堂曰、……請如古制、朝士之未入參者、必經監務・縣令、至于四品、例爲牧守、而監察司・按廉使、必行褒貶、爲之賞罰。

(74) 『高麗史』卷七十七、百官志二、外職條。諸縣、文宗定、令一人七品以上。尉一人、八品。

(75) 同上。恭愍王二年、縣令・監務、以京官七品以下充之。

(76) 『高麗史節要』恭愍王八年是歲條。是歲、大饑。慶尙道賑濟使・禮部侍郎全以道、還啓曰、「監務・縣令、職最近民、苟非其人、怨民無飢寒、不可得也。先王知其然、凡監務・縣令、皆用登科士流。今悉出胥徒、侵漁萬端、沉勸課農桑、修明教化乎。……願自今、凡監務・縣令、專用登科士流。」王然之、卒不能用（『高麗史』卷七十五、選舉志三、銓注、凡選用守令、恭愍王八年條、參照）。

(77) 『高麗史節要』辛昌即位年八月條。復以士人、爲縣令・監務。舊制、縣令・監務、皆用登科士流。近世、專以諸司胥吏爲之。貪汚虐民、階皆七八品、秩卑人微、豪強輕之、恣行不法、鄉邑殘亡。恭愍王因全以道之言、雖以五六品爲安集、慾革舊弊、然安集非出於批目、皆用時宰所舉、白牒之任。至禍時、權姦秉政、專用私人、隨其喜怒、以爲黜陟。諸縣安集、多不識字者、奪人田民、納之權

門、求媚媒進、貪殘之禍、甚於胥吏。至是始用士流、秩五六品（『高麗史』卷七十五、選舉志三、銓注、凡選用守令、辛昌即位年八月條、參照）。

(78) 『經國大典』吏典、京衙前、書吏。仕滿二千六百、堂上衙門、從七品、三品以下衙門、從八品、去官後、駟・渡丞取才、入格者、叙用。

(79) 『經國大典』吏典、京衙前、錄事。分屬議政府・中樞府。東班各衙門則議政府、西班牙衙門則中樞府分送。……元有階者、不許入屬。從六品去官後、守令取才入格者、叙用。

(80) 『朝鮮王朝實錄』世宗二十二年五月己未條。傳旨吏曹、……今後、自六品至拜五品者、非經守令、則不得陞爲四品。自四品至拜從三品者、非經守令、則不得陞爲通訓。通訓以上、未經守令者、隨宜除授。其中特旨及文章・武藝・吏文・漢語特異者、不在此限。

(81) 朴龍雲『高麗中樞院研究』(二〇〇一年、ソウル、高麗大學校民族文化研究院)は、中樞院（樞密院、密直司）の官制および任官事例に關する網羅的な研究成果である。しかし、官品構造の變革の事實を想定しない點において、本稿とは根本的に理解を異にしている。

(82) 『高麗史』卷七十六、百官志一、密直司條。文宗定、判院事一人。院使二人。知院事一人。同知院事一人。秩並從二品。副使二人。簽書院事一人。直學士一人。並正三品。知奏事一人。左右承宣各一人。左右副承宣各一人。亦正三品。堂後官二人、正七品。

(83) 同上。三十四年（一三〇八）、忠宣罷。及即位、復之。加置判院事。……恭愍王三年、判司事・知申事・四代言、皆爲祿官。

(84) 『高麗史』卷八十、食貨志三、祿俸、文武班祿、文宗三十年條。（*この條、底本には「中樞院使、同知院事」とのみあつて「知院事」が見えていないが、こちらの方は單なる誤脱であらう。）

(85) 『高麗史』卷七十七、百官志二、諸司都監各色、都評議使司條。

- (86) 國初、稱『都兵馬使』。文宗定官制、判事、以待中・平章事・參知政事・政堂文學・知門下省事、爲之。使、以六樞密及職事三品以上、爲之。副使六人、正四品以上・卿監・侍郎、爲之。判官六人、少卿以下、爲之。錄事八人、甲科權務。吏屬有記事十二人、記官八人、書者四人、算士一人。
- 〔補閑集〕卷下、漢制帝書有四。……宗室雖大誥、不宣告廷會、故不預宣麻。舊制、樞密・僕射・八座〔魏・隋・唐・皆以六尚書・兩僕射爲八座。今以六尚書左右散騎爲八座〕・上將、並「小官誥」。近樞密使、始預宣麻。僧官誥、視卿相、大小各有差。〔*「」内は原注。〕
- (87) たとえば、任懿は睿宗朝に「檢校司徒・尚書左僕射・參知政事・判樞密院事」に任命されているが、宰臣職（參知政事）と樞密職（判樞密院事）を兼ねるということ自體、極めて例外的な事例である（『高麗墓誌銘集成』十六、任懿墓誌銘）。
- (88) 『高麗史節要』卷二十三、忠宣王二年八月條。王傳旨曰、「式目都監、掌邦國重事。其以僉議政丞、判三司事、密直使、僉議贊成事、三司右左使、僉議評理以上、爲判事。知密直以下爲使。密直司、陞二品、與僉議府、同稱兩府。」又改諸司及州郡號。
- (89) 周藤吉之『高麗朝官僚制の研究』（一九八〇年、東京、法政大學出版局）、特に第二章第四節「中樞院（樞密院）の宰相表とそれらの諸問題」（四四一六〇頁）、參照。
- (90) 『高麗史』卷七十六、百官志一、密直司條。（恭愍王）五年、復改樞密院。員秩並復文宗舊制。
- (91) 朴龍雲『高麗時代中書門下省宰臣研究』（二〇〇〇年、ソウル、一志社）は、中書門下（僉議府、中書門下省、門下府）の宰臣の官制、および任官事例に關する網羅的な研究成果である。しかし、官品構造の變革の事實を想定しない點において、本稿とは根本的に理解を異にしている。
- (92) 『高麗史』卷七十六、百官志一、門下府條。
- (93) 『高麗史』卷七十八、食貨志一、田制、功蔭田柴、文宗三年五月條。
- (94) 「職事一品官」のなかの「門下侍郎平章事以上」と解釋することもあるが、その場合は、平章事が「二品官」であつたことになるから、平章事が「秩正二品」であつたとする「百官志」の記述とは矛盾する。また「僉議府」が本來「二品衙門」であつたとする本稿の立場とも矛盾するから、この解釋は取らない。
- (95) 『高麗墓誌銘集成』四、柳邦憲墓誌銘によると、柳邦憲は穆宗九年（一〇〇六）に「内史侍郎・平章事」（後の中書侍郎・平章事）に「制可」され、穆宗十二年（一〇〇九）に「門下侍郎・平章事」に「教可」されている。「制可」とは「小官誥」による任命であり、「教可」とは「大官誥」による任命である。したがって、中書侍郎と門下侍郎は同じ「二品官」でも差等があり、前者は「二品」に準じる待遇を受けない「二品官」、後者は「二品」に準じる待遇を受ける「二品官」であつたと考えられる。
- (96) 周藤吉之、前掲書、特に第二章第三節「内史（中書）門下省の宰相表とそれらの諸問題」（十六一四四頁）、參照。
- (97) 同右。
- (98) 『高麗史』卷七十七、百官志二、諸司都監各色、都評議使司條。國初、稱『都兵馬使』。文宗定官制、判事、以待中・平章事・參知政事・政堂文學・知門下省事、爲之。使、以六樞密及職事三品以上、爲之。副使六人、正四品以上・卿監・侍郎、爲之。判官六人、少卿以下、爲之。錄事八人、甲科權務。吏屬有記事十二人、記官八人、書者四人、算士一人。
- (99) 『高麗墓誌銘集成』一七〇、柳光植墓誌銘。甲戌冬、拜銀青光祿大夫・樞密院副使・判閣門事。……年、授金紫光祿大夫・知門下省事・尚書右僕射・判三司事。

- (100) 『高麗墓誌銘集成』一七五、鄭邦輔墓誌銘。授銀青光祿大夫・樞密院副使・右散騎。今上即位三年、特授金紫光祿大夫・知門下省事・尙書左僕射・判戶。...
- (101) 『高麗墓誌銘集成』一八一、琴儀墓誌銘。癸酉、進拜銀青光祿大夫・簽書樞密事・左散騎常侍・翰林學士承旨。乙亥、入相、金紫光祿大夫・政堂文學・左僕射・寶文閣大學士・修國史。
- (102) 『高麗墓誌銘集成』一八八、李奎報墓誌銘。癸巳六月、拜銀青光祿大夫・樞密院副使・右散騎常侍・寶文閣學士。十二月、入相、金紫光祿大夫・知門下省事・戶部尙書・集賢殿大學士・判禮部事。
- (103) 『高麗墓誌銘集成』一九八、元傳墓誌銘。五十、受銀青光祿大夫・樞密院副使・右常侍・翰林學士承旨。其年抄陪大駕、朝上國別有功焉。翌年夏、隨駕還朝、入相、爲金紫光祿大夫・政堂文學・吏部尙書・寶文閣大學士・同修國史・判三司事・太子少保。
- (104) 『高麗墓誌銘集成』一五六、尹彥頤墓誌銘。粵十二月、制誥公、進拜銀青光祿大夫・政堂文學・判尙書刑部事。
- (105) 『高麗墓誌銘集成』六十、崔梓墓誌銘。十二月、加銀青光祿大夫・檢校司徒・守司空・尙書左僕射・參知政事・判禮部事。
- (106) 『高麗墓誌銘集成』一一五、崔惟清墓誌銘。則以公爲銀青光祿大夫・尙書左僕射・參知政事。
- (107) 『高麗墓誌銘集成』一四五、金純墓誌銘。甲寅正月、別批、授銀青光祿大夫・參知政事・禮部尙書。
- (108) 『高麗墓誌銘集成』一六八、崔忠獻墓誌銘。自茲以後、年除歲遷、階至於金紫光祿大夫。……本朝舊制、階・功・鄉・職之至此、必待陞宰府者、然後授之。
- (109) 『高麗史』卷八十四、刑法志一、職制、公牒相通式、睿宗九年(一一一四)六月條。禮儀詳定所、奏曰、「近來、朝廷之間、所行表狀書簡、稱號不正、非所以正名之義。臣等慾望、凡上表者、稱
- (110) 『聖上』、『陛下』、上箋、稱「太子」、
「殿下」。諸王曰「令公」。
中書令・尙書令、曰「太師」「令公」。兩府執政官、曰「太尉」「平章」「司空」「參政」「樞密」「僕射」、各隨時職稱之。三品以下員寮、並不稱「相公」、宜直呼官名。
- (111) 邊太變「高麗政治制度史研究」(一九七一年、ソウル、一潮閣)官職(官)と位階(位)とが同等であること。直接には日本の律令制の用語である。
- (112) 『高麗史』卷七十七、百官志二、文散階、忠烈王元年條。改金紫光祿爲匡靖。○同、忠烈王三十四年條。忠宣又改官制、……正二品曰匡靖大夫。
- (113) 『高麗史』卷七十七、百官志二、文散階、忠烈王元年條。銀青光祿爲中(奉)(議)(*)『高麗墓誌銘修成』二〇〇、許珙墓誌銘によると、許珙は元宗十三年(一二七二、年四十)に「銀青光祿大夫・簽書樞密院事・翰林學士承旨」としてはじめて樞密院の宰相に昇進し、その後「上朝の官制」を避けて「中議大夫・密直司使」に改められた。したがって、「中奉」は「中議」の誤りであろう。ところが、元制にも「中議大夫」があるので、これは後に「通憲大夫」に改められる。○同、忠烈王三十四年條。忠宣又改官制、……從二品曰通憲大夫。
- (114) もっとも密直副使は、その後、「正三品」に引き下げられているが、これは朝鮮時代の通政大夫(正三品)のように、二品に準じる「三品堂上」として位置づけられていたのである。
- (115) 『龍飛御天歌』第一百六章、注。高麗時、二品以上、得爲樞密院堂上官。故拜二品者、謂之入樞。
- (116) 『高麗史』卷八十四、刑法志、職制、公牒相通式、忠烈王二十四年五月條。忠宣王即位敎曰、「於朝廷間、有僭越尊稱者、實非禮也。宜於諸王、則書籤、直稱某公侯。寒暄、稱「令侯」「令旨」。宰執諸二品官、諸籤、除「令公」。寒暄、稱「鈞旨」「鈞侯」。諸

三品、隨職稱之。寒暄、稱「臺旨」「臺侯」。率以爲常。違者治之以法。」

(117) 『朝鮮王朝實錄』世宗二十一年正月丙午條。……或謂、「不可以宰相之職、授野人。」然二品以上、豈可總謂之宰相哉。居變理輔相之位者、乃眞宰相也。高麗之季、乃以樞密以上、皆稱宰相、甚無謂也。

(118) 花村美樹「周官六翼と其の著者」(『京城帝國大學法學會論文集』第十二冊第三・四號、一九四一年十二月、京城、京城帝國大學)。許興植「金社の選粹集と周官六翼」(『高麗の文化傳統と社會思想』所收、二〇〇四年、坡州、集文堂。拙稿「高麗王言考」(『史林』第七十七卷第一號、一九九四年一月、京都、史學研究會)等、參照。

(119) 『世宗實錄』十三年正月丁丑條。吏曹啓、「外官品秩、請依『周官六翼』、從二品留守官、正三品大都護府・牧官、從三品都護府、從四品知郡事、從五品判官・縣令、從六品縣監。」從之。

【補論】

官人のもつ位階(散官)と官職(職事官)は、本來、同品秩のものでなければならぬ。これがいわゆる「官位相當」の原則であるが、この原則は唐制でも、また唐制を繼受した高麗前期の制度でも早くから形骸化し、特にエリート官僚の場合には位階の昇進より遙かに早いスピードで官職の昇進が行われていた。このため、官人の地位の高下は、もっぱら官職の高下によって定められ、官職自体が一種の位階としての機能をも果たすようになっていく。本稿が高麗前期の官人の官品を、もっぱらその官職(職事官)によって判斷しているのは、このためにほかならぬ。しかし、高麗では忠烈王三十四年の官制改革以降、「官位相當」の原則が再建され、官職の昇進は位階の昇進によって厳しく規定されることが原則となった。このことは、忠烈王三十四年における官制改革の最も重要な改革点の一つであると考えられるが、この点について、本稿ではやや説明不足であったので補足しておく。